

イスラーム信頼学

News Letter No.03

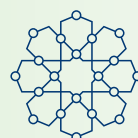
2023



巻頭特集..

2022年度国際会議

「ムスリムのコネクティビティに見る
翻訳と変化」



イスラーム信頼学

Islamic Trust Studies

04……………**巻頭言**

プロジェクトの
折り返し点を越えて
新たな動きに対する挑戦を
——黒木英充

05……………**巻頭特集**

国際会議

「ムスリムの

**コネクティビティに見る
翻訳と変化」**



11……………**イスラーム信頼学エッセー**

12……1 オスマン帝国史の中のユニークな仲介者
マヌク・ベイ

——**黛秋津**

14……2 昭やおじさん、
デジタル・ヒューマニティーズに挑む

——**伊藤隆郎**

16……………**フィールドでつなぐ・つながる**

スマホ写真でつながる、そして運に頼る

——**石井正子**

17……………**〇〇に埋め込まれた信頼**

18……1 人名録出版に埋め込まれた信頼

——**磯貝真澄**

20……2 利子に埋め込まれた信頼

沖縄の模合(頼母子講)から考える

——**平野(野元)美佐**



22	総括班新企画	「信頼学のキッチン」活動報告
24	新刊紹介	『人文学のためのテキストデータ構築入門』 —— 出川英里
25	シビルダイアログ・キャラバン	「空と海がつなぐ世界」報告 —— 太田(塚田)絵里奈
28	シリーズ	「イスラームからつなぐ」刊行案内
30	2022年度イスラーム信頼学全体集会	「対立と紛争のなかで、つなぐ」
32	研究の最前線1	伝統的な「互助の信頼」と 金融デジタル化の最新テクノロジー 水と油か、新しい融合か —— ハシャン・アンマール
34	研究の最前線2	SNSがもたらすイスラームの 新たな水平的コネクティビティ —— ニツ山達朗
36	研究の最前線3	ウクライナ難民支援 研究と実務の交わるどころ —— 長有紀枝
38	教えて！佐藤さん	地域間の関係を地図化して捉える —— 佐藤 将
39	教えて！嘉藤さん	インド洋の港市・異文化間交易・信頼 —— 嘉藤慎作
40	各班の概要と活動	(A01, A02, A03, B01, B02, B03, C01)
54	2022年度の活動報告	
59	執筆者プロフィール	



- 22……………**総括班新企画**
「信頼学のキッチン」活動報告
- 24……………**新刊紹介** 『人文学のためのテキストデータ構築入門』
—— 出川英里
- 25……………**シビルダイアログ・キャラバン**
「空と海がつなぐ世界」報告
—— 太田(塚田)絵里奈
- 28……………**シリーズ** 「イスラームからつなぐ」刊行案内
- 30……………**2022年度イスラーム信頼学全体集会**
「対立と紛争のなかで、つなぐ」
- 32……………**研究の最前線1**
伝統的な「互助の信頼」と
金融デジタル化の最新テクノロジー
水と油か、新しい融合か
—— ハシャン・アンマール
- 34……………**研究の最前線2**
SNSがもたらすイスラームの
新たな水平的コネクティビティ
—— ニツ山達朗
- 36……………**研究の最前線3**
ウクライナ難民支援 研究と実務の交わるどころ
—— 長有紀枝
- 38……………**教えて！佐藤さん**
地域間の関係を地図化して捉える
—— 佐藤 将
- 39……………**教えて！嘉藤さん**
インド洋の港市・異文化間交易・信頼
—— 嘉藤慎作
- 40……………各班の概要と活動
(A01, A02, A03, B01, B02, B03, C01)
- 54……………2022年度の活動報告
- 59……………執筆者プロフィール

プロジェクトの折り返し点を越えて

新たな動きに対する挑戦を



領域代表

黒木英充

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
北海道大学スラブ・ユーラシア
研究センター（併任）

早いもので、2020年12月から始まった本領域研究は折り返し点を通過しました。この間、常にCOVID-19の流行期でした。みなさまご自身、あるいは身近な方が罹患されたこともおありかと拝察し、お見舞い申し上げます。変異を続けるウィルスに対して、人類は移動の停止やワクチン開発により立ち向かったのですが、結局のところ一定の感染を免れることができず、「ウイズコロナ」を選ばざるをえないことになりました。

一方、2022年はウクライナ戦争の強いインパクトを受けた年でもありました。この戦争は、ロシアとウクライナの二国間だけの問題ではなく、過去の様々な時点に端を発する国際的な変動要因が複合した帰結ととらえることが必要です。人類の生存を脅かす核戦争の可能性を深刻に危惧しつつも、地球社会全体を見渡せば、この戦争の受け止め方の多様性のなかに、国際政治の枠組み変動の兆しを看取することもできます。同時に、複数の要因は、異なる要素も含めた別の複合の仕方により、新たな形態の危機を生み出すことも予想されます。

コネクティビティを基軸に据えて信頼構築のあり方を考える本プロジェクトの副題は、「世界の分断をのりこえる戦略知の創造」です。COVID-19とウクライナ戦争により、世界の分断はさらに深まりましたが、それだけいっそう研究者の力量が問われているといえましょう。

2022年は海外出張・調査に出かける人も増え、11月には久しぶりに対面式の国際会議を大阪で開催することができました。オンライン会議が便利に行えるようになって、直接のコミュニケーションがいかに大事であるかを痛感し、コネクティビティの質というべきものを考えさせられました。

これから2年間、さらに大きな変化の波に直面するかもしれません。それぞれの専門分野からイスラーム的コネクティビティと戦略知の可能性を意識的にとらえ直し、研究内容を深化させるとともに、新たな課題も見つけ出す挑戦の機会にしましょう。

レバノン内戦の記憶保持のための博物館 Beit Beirut (ベイルートの家)
狙撃手の砦となった共同住宅跡を利用 (撮影2022年11月)



ムスリムの コネクティビティに見る 翻訳と変化

2022年11月26日から27日の2日間にわたり、イスラーム信託学第二回国際会議“Translation and Transformation in Muslims’ Connectivity”（ムスリムのコネクティビティに見る翻訳と変化）が開催された。イスラーム信託学プロジェクトの国際会議は、昨年度の第一回に続いて二度目の開催となり、本プロジェクトを構成する計画研究班のうち、A02班とB02班の合同企画の下で進められた。本国際会議の一つの重要な目的である海外の研究者コミュニティとの関係づくりをより豊かなものにするため、第二回となる本国際会議は、感染症に対する入念な対策を施した上で大阪大学箕面キャンパス会場とZoomミーティングのハイブリッド形式で開催された。イスラーム信託学のプロジェクトメンバーのほか、アメリカ、イギリス、ドイツからの招聘者、そしてカザフスタン、ミャンマーからのオンライン参加者が登壇し、それぞれから充実した報告がなされ、活発な議論も展開された。このような場を実現できたことは、ハイブリッド開催ならではの一言。参加者は対面とオンラインで計63人となり、国内外から幅広い層の参加が見られた。

本国際会議は「翻訳」と「変化」という2つのキーワードを設定し、異なる国・地域で様々な研究課題に取り組む研究者の参加を幅広く募った。その結果、法多元主義の歴史的展開から現代ムスリム・コミュニティの関係構築、多民族社会における権利と法に至るまで、報告の主題や射程も多岐にわたるものとなった。また、続く議論の中でも参加者から多様な知見や視角が持ち込まれ、研究分野や対象地域を横断してムスリムのコネクティビティを検討する貴重な場となった。

各セッションの進行と議論の詳細については次頁以降をご覧ください。ここではその議論が会議中に留まらず、休憩時間や1日目の情報交換会においても盛り上がりを見せ、研究者間の活発な国際交流を生み出したことも成果として挙げておきたい。さらに2日目の総合討論においては、プロジェクトとして見えてきたことやその過程で改めて把握された乗り越えるべき課題について質問がなされた。また、信託についての考え方などについて招聘者からも積極的に問題が提起され、実りのあるディスカッションがおこなわれた。

文責：藻谷悠介

イスラーム信頼学第二回国際会議

“Translation and Transformation in Muslims’ Connectivity”

(ムスリムのコネクティビティに見る翻訳と変化)

2022年度になって、ようやく国際会議を対面（+オンライン）で開催することができました。11月26日・27日に大阪大学箕面キャンパスで開催された第二回国際会議についてご報告します。

野田 仁 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

山根 聡 大阪大学



A02班代表・野田仁



B02班代表・山根聡

今回の国際会議のテーマは、「コネクティビティにおける翻訳と変化」でした。A02班が担当する翻訳を手掛かりとしてイスラームの複数性を考察するアプローチと、B02班が担当するムスリムの戦略を組合せ、長期の歴史のなかでトランス・ナショナルな状況をどのように理解できるかを問うものでした。全体の方向性として、国際会議当日、B02班代表の山根聡が説明したように、トランス・ナショナルな現状において、ムスリム・非ムスリム間の関係を、特に戦略的に注目する報告が多くありました。

第一セッションは、A02班が主担当となりました。“Legal Pluralism and Islam in the History of Empires”（帝国の歴史における法多元主義とイスラーム）と題して、ニューヨーク大学からGuy Burakさんを招聘しました。ブラクさんは、オスマン帝国のカーヌーンを言説として分析し、他の単

語への置き換えや意味の多様性を示しました。続いて、A02班の研究協力者としてイスラーム信頼学プロジェクトに参画しているカザフスタンのZhanar Jampeissovaさん（アスタナIT大学、オンライン参加）とA02班代表の野田仁が共同報告を行いました。19世紀末から20世紀初頭にかけてのロシア帝国と中国清朝のあいだで行われていた国際集會裁判に注目し、この紛争解決のための仕組みにおける、当事者たちおよびロシア当局の戦略的な言語交換、翻訳について明らかにしました。グローバル・ヒストリーで著名なGagandeep Soodさん（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）に討論者をお願いし、比較史的な立場から有益なコメントをいただきました。前者に対しては、表現・言説としてのカーヌーンと、実際の運用との間をどのように把握するべきかについてコメントがあり、後者については他の帝国の法制度との比較の視点が示されました。

2日目午前の第二セッションはB02班が主担当となりました。セッションのタイトルは“Faith and Strategy: The Dynamics of Trust Building within Muslim Communities”（信仰と戦略：ムスリム・コミュニティにおける信頼構築のダイナミズム）と題するもので、特に現代社会のムスリムの事例に焦点を当てて報告がありました。特に、ムスリムが自己のアイデンティティをいかに探求するか、また、非ムスリムとの関係性のなかでいかなる選択を行ってきているかについての報告がありました。ドイツのフンボルト大学からお招きしたFaiza Muhammad Dinさんは、ハディースにおける女



性の記述を引用しつつ、アフガニスタンやパキスタン、インドネシアのイスラム女性の学生の事例を用いながら、自らの教育の確保するためにいかなる努力を行っているかについて報告されました。また、B02班研究分担者の工藤正子さん（立教大学）は、日本に居住するパキスタン人の父と日本人の母の間に生まれたイスラム女性たちが、自らのイスラムとしてのアイデンティティをいかに構築しているかについて、彼女たちの戦略性に注目しつつ報告されました。この両者の報告に対して、南アジアや東南アジアのイスラムの動向を研究しているMarrie Lallさん（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン）からコメントをいただきました。

午後は第三セッションとして、東南アジアに焦点を当てた、“Right and Law in the Multi-Ethnic Societies”（多民族社会における権利と法）を設定しました。最初にB02班の研究分担者である池田一人さん（大阪大学）の“Becoming Rohingya in Myanmar: Ethnic Politics in the U Nu Era 1948-1962”が、現在ミャンマーで懸案となっているロヒンギャをめぐる問題について、19世紀のイギリス植民地期にさかのぼり、歴史的な展開の中でこの問題がいかに発生したのかについての概観がなされたのち、1948年のミャンマー独立後、1950年代後半のウ・ヌー政権下においてイスラム居住区ラカインが制定されたとき、イスラム自身がロヒンギャと名乗った「戦略性」に着目して、これを

歴史的に考察しました。次に、A02班研究分担者の高野さやかさん（中央大学、オンライン参加）の“Legal Pluralism and Connectivity in Indonesia”が、現代インドネシアにおける国家法、慣習法、イスラーム法の使い分けについて、具体的な係争事例を挙げながら明らかにすることで、イスラムと非イスラムの法的な位置づけを論じました。これら各報告に対して、Zaw Lynn Aungさん（ミャンマーの研究者）がミャンマーからオンラインで、またスードさんからも貴重なコメントをいただきました。

最後の全体討論では、各報告に対する個別の質疑に加えて、プロジェクトの今後も含め、さまざまな課題を討論しました。とりわけ印象的だったのは、「イスラーム」と「信頼」という2つのキーワードをなぜ、どのように結び付けて考えるのかという点で議論が展開したことです。この研究プロジェクトで始まった「イスラーム信頼学」という新たな学問を今後定着させていくうえで、その方法論、研究手法についてさらなる議論や検討が必要となることを実感いたしました。コロナ禍から脱しようとしている今、人と人とのコネクティビティを多角的に検討することは、意義深いと確信しました。今回、一部オンラインとはいえ、対面式の開催を実現できたことで、内外のさまざまな学問分野の研究者と議論を交わすことの重要性と楽しさをあらためて認識いたしました。

「帝国の歴史における法多元主義とイスラーム Legal Pluralism and Islam in the History of Empires」

奥田弦希 東京大学大学院・博士課程

本国際会議の最初のセッションは、「帝国の歴史における法多元主義とイスラーム Legal Pluralism and Islam in the History of Empires」というタイトルのもと、イスラームの概念の解釈や翻訳が法的问题、特に紛争解決において果たした役割について、15世紀のオスマン帝国と19世紀後半から20世紀初頭にかけてのロシア帝国統治下のカザフステップの例から検討した。

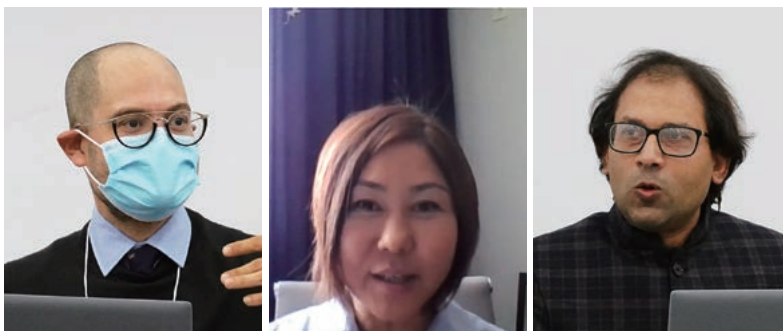
最初に行われたGuy Burak氏の“Writing a Conceptual History of Early Ottoman Kanun”と題する報告は、「長い15世紀」におけるオスマン帝国のカーヌーンをめぐる言説と概念を追ったものである。カーヌーンとは、シャリーアを補完するかたちで政治権力者が国家運営の必要から立法する独自の法規範のことを指すが、15世紀のオスマン帝国においてはこのカーヌーンという語が頻繁かつ広範に出現するようになる。ブラク氏はカーヌーンの導入を、14世紀から15世紀にかけてモンゴルやティムール朝といった過去・現在の他の支配者から自身を区別し、独自の新しい帝国像を打ち立てようとする、オスマン化の試みの一端であったと位置づけている。さらにブラク氏は、15世紀のオスマン帝国におけるカーヌーンの隆盛を下支えしたのが、ガザーリーの『宗教諸学の再興 Iḥyā' 'ulūm al-dīn』の受容であったと示唆している。

次に行われたZhanar Jampeissova氏と野田仁氏の“Translated ‘Legal’ Code: Difference of Understanding the Law between Kazakh Nomads

and Russian Colonial Officials”と題する報告は、新疆のロシア・清間の国境地帯に居住する両国臣民の紛争を解決するために新設された国際集会裁判所 (International Assembly Court、以下IAC) での法的手続きに焦点を当てることで、ロシア帝国の法多元主義を検討したものであった。このIACの大きな特徴は、法的手続きがロシア帝国の法規範ではなく、現地住民の法 (シャリーアおよび慣習法) に基づいていた点にある。本報告では、第一にロシア帝国の官吏たちは実際には現地住民の法をほとんど理解していなかったこと、第二に裁判において客観的事実を確認するための手段として重要視されたのが宣誓であり、宣誓が紛争解決における重要な法的手続きとして認識されていたこと、そして結論として、以上の点はロシア帝国の官吏たちが裁判結果を操作し、個別の事例に対応する上で重要な役割を果たしていたことが解明された。

両報告の後には、最初にディスカッサントのGagandeep Sood氏からコメント・質問がなされた。スード氏はまず両報告を評価した上で、ブラク氏の報告に対しては主にカーヌーンの蓄積と運用の在り方について、ジャンペイソワ氏と野田氏の報告については主に被統治者側の動向や他地域の事例との比較の観点を中心にコメント・質問を提示した。続く全体の質疑応答では、ジャンペイソワ氏と野田氏の報告に対して、ロシア帝国の官吏が現地の法を理解しなかったのは意図的なものだったのか、という質問が参加者からなされた。

本セッションを通して、ムスリム住民を抱える諸帝国における法多元主義について、初期オスマン帝国とロシア帝国統治下のカザフステップの例から同時代的状況に即して立体的に提示されることとなった。今後他地域との比較や、被統治者側の動向も踏まえつつ統治者・被統治者間の法的な相互作用について検討することで、本セッションのテーマはさらに奥行きのあるものとなるだろう。



Guy Burak氏

Zhanar Jampeissova氏

Gagandeep Sood氏

「信仰と戦略：ムスリム・コミュニティにおける信頼構築のダイナミズム Faith and Strategy: The Dynamics of Trust Building within Muslim Communities」

賀川恵理香 京都大学大学院・博士課程

国際会議の二日目午前に行われた本セッション「信仰と戦略：ムスリムコミュニティにおける信頼構築のダイナミズム Faith and Strategy: The Dynamics of Trust Building within Muslim Communities」では、本会議全体のテーマである「信頼 trust」と「コネクティビティ connectivity」を軸に、パキスタンに焦点を当てた議論が展開された。

一人目の報告者、Faiza Muhammad Din氏による“Trust and Muslim Women’s Mobility”と題する報告では、パキスタンにおける女子マドラサをめぐる信頼構築 trust buildingの様相が論じられた。ムハンマドディーン氏によると、パキスタンでは、1990年代以降女子マドラサの数が急増したという。その背景には、1980年代に政治的に進められたイスラーム化の影響が存在する。ムハンマドディーン氏は、宗教的権威としてのマドラサに対して女性たちの家族が（暗に）抱く信頼の存在を指摘する。そしてその信頼の存在が、農村部出身の女性たちが都市部で教育を受けたり、ドイツでの研修旅行に参加したりすることを可能にしたという。結論として、同氏は、信頼構築がなされる背景として、倫理観や宗教観等の価値観が共有されていることや、宗教、文化、言語、イスラーム法学解釈 fiqh 等の親しみやすいシンボルが共通の土台として存在していることが挙げられると述べた。

ムハンマドディーン氏がパキスタン国内における事例を論じたのに対して、二人目の報告者である工藤正子氏は、“Negotiating Identity among Muslim Women with Pakistani Fathers and Japanese Mothers: An Exploration of Connectivity, Gender, and Strategicity Perspectives”という題目のもと、日本人女性を母に持ち、パキスタン人男性を父に持つというトランスナショナルな状況下に置かれた若年のムスリム女性たちに着目した事



Faiza Muhammad Din氏

工藤正子氏

Marrie Lall氏

例を報告した。工藤氏によると、こうした女性たちのアイデンティティ形成にまつわる状況は、幼少期を過ごした場所、学校教育での経験、さらには家庭内のパワーバランスに応じて多岐にわたるといふ。工藤氏は、様々な局面において周縁化された経験を持つ女性たちが、自ら積極的にイスラーム的な知識を獲得することによって、自らの宗教的アイデンティティについて考えたり、父親をはじめとした周囲と交渉したりする事例を紹介することによって、イスラームを通じたコネクティビティの可能性を論じた。

これらの報告を受けて、ディスカッサントのMarrie Lall氏は、報告者両者が用いる「信頼」と「コネクティビティ」の意味合いに大きな隔りがあることを指摘したうえで、学術的な議論においては共通の定義が必要であると述べた。さらにラル氏からは、射程の異なる両者の議論をつなぐものとして「教育」という観点が提示され、それぞれの事例において対象とされる女性たちにとって、教育を受けることが、彼女たちのアイデンティティ構築にどのように関わっているのか、という論点が出された。

「多民族社会における権利と法 Right and Law in the Multi-Ethnic Societies」

浅井登紀子 京都大学大学院・博士課程

「多民族社会における権利と法 Right and Law in the Multi-Ethnic Societies」という題目のもと行われた国際会議最後のセッションでは、歴史学と法人類学の視点から東南アジアにおける権利と法に関わる報告が行われた。

池田一人氏による最初の報告では“Becoming Rohingya in Myanmar: Ethnic Politics in the U Nu Era 1948-1962”というタイトルのもと、独立後の1948年から1962年までのウー・ヌ政権期を中心に、ロヒンギャと呼ばれ今日では移民（不法移民）とみなされ国家から排除されている状況にある北部ラカイン地域のムスリムをとりまく動きが検証された。1942年の仏教徒との衝突がラカイン地域のムスリムにとっての民族政治の契機となり、そ

の後権利をめぐる運動が展開された一方、ウー・ヌ政権はムスリムを国民として包摂することを試みていたことが論じられた。英植民地政府によって導入されたムスリムを「移民」と捉える視点はそれまでのミャンマー社会では一般的ではなく、イギリスによる分割統治政策が民族問題をもたらしたという今日のミャンマーで主流となっている言説は、1962年以降のネ・ウィン政権期のムスリムに排他的な政策の流れで強化されたことが検証され、こうした言説の再考の必要性が指摘された。

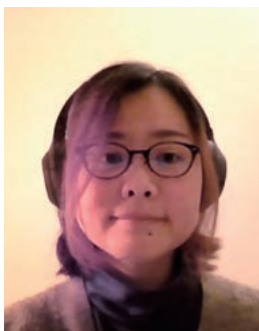
高野さやか氏による二つ目の報告では、“Legal Pluralism and Connectivity in Indonesia”というタイトルのもと、法多元主義に関する研究蓄積が豊富なインドネシアにおける事例が扱われた。最初にインドネシアにおける国家法、イスラーム法、アダットと呼ばれる慣習法の併存と司法制度が解説された。2つのアクターが関わる北スマトラの土地紛争の事例からは、国家法の領域における争点や文脈によって「アダット」という概念が示すものが変化することや、訴訟のプロセスで多元的な法の要素が相互に参照され変化し合うことが論じられた。コネクティビティの観点からは、人々は多様な法や社会規範を通してつながり合っていることが論じられ、法的要素の関係性を論じる上で、多元的な法を別個のカテゴリーととらえ対立関係として論じる先行研究の視点を超えて、それぞれの相互参照と相互浸透に焦点を当てる重要性が指摘された。

質疑応答では、ロヒンギャについて論じる際のおもに歴史と歴史編纂に関わる課題について議論が行われた。また、3種類の法がナショナル、ユニバーサル、ローカルという異なるレベルでのアイデンティティに関わるのではないかという指摘がなされ、地域における統合に関わるアイデンティティや帰属意識とそれらの法との関係などについて議論が行われた。

全体討論の様子



池田一人氏



高野さやか氏



ディスカッサントの
Zaw Lynn Aung氏

イスラーム信頼学 エッセー



サルケージ・ローザ (2019年、
インド・アフマダーバード、
嘉藤慎作撮影)

イスラーム信頼学プロジェクトでは現代のみならず、国家間・個人間における信頼やコネクティビティの歴史的なあり方にも広く目が向けられている。信頼やコネクティビティといった抽象概念は、歴史研究の場においてはいかにして可視化され得るのか。

黛「オスマン帝国の中のユニークな仲介者——マヌク・ベイ」では、戦争当事国の双方に人脈を持つ有力者が仲介役を果たした歴史的事例として、ロシア=オスマン戦争(1806-1812)における和平交渉を仲介したマヌク・ベイの活動が紹介される。アルメニア系の商人として成功した彼は、オスマン朝の有力者と人脈を築く一方で、ワラキア公を財政的に支え、ワラキア公国の要職を得たことにより、ブカレストに政治的・経済的基盤を築いた。その一方でブカレストのロシア領事を通じてロシア国籍を取得するなどロシアにも接近した。二つの戦争当事国に人脈をもつその立場ゆえに、彼はブカレストに建設した自身の館で両国の和平交渉を仲介するに至ったという。

続いて、「昭とおじさん、デジタル・ヒューマニティーズに挑む」というユニークなタイトルを冠する伊藤エッセーでは、同氏のデジタル・ヒューマニティーズ(人文情報学)との衝撃的な出会いから、15世紀エジプトの学識者サハーウィーの手になる伝記集『輝ける光』のデジタルテキスト作成の進捗状況、そしてデジタルテキストを用いた人文学的手法の今後の可能性として、伝記中の人々の婚姻関係や師弟関係といったコネクティビティの分析、さらには他史料への分析対象の拡大といった展望が語られる。その一方で、デジタルテキストや刊本の信頼性といった基本的な問題の存在にも触れられている。

19世紀オスマン朝・ヨーロッパ外交の場における仲介者、そしてデジタル・ヒューマニティーズ的手法を用いたネットワーク分析にかんするふたつのエッセーを通じて、国家間及び個人間における信頼やコネクティビティの歴史的なあり方に迫る。

荒井悠太

オスマン帝国史の中のユニークな仲介者 マヌク・ベイ

黛 秋津
東京大学

歴史上、政治的・経済的に影響力のある、いわゆる「経済人」が国と国の間を取り持つことはしばしば見られるが、イスラーム世界と異教徒世界に属する国家間の信頼構築においても、そのような事例があった。

「話せばわかる」、「問答無用」——1932年の五・一五事件で、時の総理大臣犬養毅と、総理官邸に押し入った海軍青年将校たちとの間で最後に交わされたと言われるこの会話は、実際には、同事件を象徴すべく、ある程度の長さのやり取りを要約したものであるが、犬養は青年将校たちを説得しようと試み、結局その試みは成功することなくこの世を去ることになった。

「信頼」の問題を考える時、筆者はこのエピソードを思い出す。相手を説得する可能性を信じていた犬養と、自らの信念を貫き、計画を実行した青年将校たち。犬養と同じく筆者も、膝を突き詰めて話せば相手はきっとわかってくれると信じたが、必ずしもそうならないことは承知しているし、そもそも話す機会を得ることさえ出来ないことすらある。これ

が異なる文化的背景を持つ人々の間であれば、なおさら信頼関係を築くのに多くの困難が伴うことは容易に想像できよう。

いにしえより人と人との信頼を築くためには様々な工夫がなされてきた。とりわけ国の支配者や政府のレベルでは、信頼を構築できるか否かが多くの人々の暮らしと安全に影響する。それ故、「間を取り持つ人」がしばしば重要な役割を果たしてきた。筆者は主に18世紀後半から19世紀前半のバルカン・黒海地域の政治外交史を専門としているが、ロシアを含むヨーロッパ諸国とオスマン帝国との間で軋轢が強まったこの時期、間を取り持つ人の役割はますます大きくなっていった。こうしたつなぎ役として真っ先に思い浮かぶのは、テルジュマン (tercüman) あるいはドラゴマン (dragoman) と呼ばれ、オスマン帝国の外交分野で活躍していた人々かもしれない。日本語では「通訳」、あるいはやや古めかしく「通詞」などとも訳されるが、彼らはただ言葉を訳すだけではなく、外交交渉や通常的外交活動において重要な役割を担っていた。19世紀初頭まで、彼らの多くはギリシア系の有力家系の出身者であり、ヨーロッパの言語と文化に造詣の深い彼らは、列強の進出を受けるオスマン帝国の外交においてなくてはなら

写真1:「マヌクの館」外観



写真2:「マヌクの館」入口



写真3: フンチェシュティの屋敷

ない存在であった。

ところで、この「通訳」は、雇われた側の利益を最大限に追求する存在であるだけに、つなぎ役ではあるものの、「仲介者」とは言えない。その一方で、国と国との間に入って利害を調整する「仲介者」も存在していた。近代移行期のオスマン帝国とヨーロッパの国の間に入るのは、当事者以外のヨーロッパ諸国の代表である場合が多いが、筆者の研究対象において、ある個人が、二つの国の仲介者として信頼構築に尽力するという興味深いケースがあった。それが、1806年に始まるロシア＝オスマン戦争において、両国の和平に尽力したマヌク・ベイという人物である。

彼は本名をマヌク・マルティロス・ミルザヤンと言い、1769年にルスチュク（現在のブルガリア領ルセ）に生まれたアルメニア系の人物である。若くして商人となった彼は、商才を発揮して活躍し、バルカンを代表する大商人となった。彼は様々な有力者と人脈を持ち、当時、アーヤーンと呼ばれる地方有力者がバルカン各地で力を持っていたが、地元のルスチュクのアーヤーンであるティルシニクリオウル・イスマイル、そしてその後継者であり、1808年にイスタンブルへ上って権力を掌握し、短い間ではあるが大宰相としてオスマン帝国史に名を遺したアレムダル・ムスタファ・パシャと深く結びついた。同時に彼はワラキア公を財政的に支え、ワラキアで要職を得たことにより、ブカレストに確固とした政治的・経済的基盤を築くことになった。さらには、当時バルカンへの進出を本格化させていたロシアにも深く食い込み、ブカレストのロシア領事にロシア国籍取得を請願し、これに成功している。こうしてワラキア・モルドヴァ両公国やロシアとも結びつきを強めたマヌク・ベイは、ロシア＝オスマン戦争中の1808年、ブカレスト中心部に館を建設した。「ハーヌ・ルイ・マヌク（Hanu' lui Manuc、「マヌクの館」の意）」とルーマニア語で呼ばれるこの建物では、その後まもなくロシアとオスマン帝国の間の和平交渉が行われ、ロシア政府関係者ともオスマン政府関係者とも人脈を有するマヌク・ベイは、自らの館で両者の和平交渉を仲介し、その結果、1812年にここでブカレスト条約が締結された。

この建物は、当初はオフィス兼商業施設であったが、19世紀後半以降は宿泊施設に転用された。所有者も転々とし、何度かの大規模な修復も行われたが、建物は現在でも存在し、ブカレストの観光名所の一つとして賑わいを見せている。筆者は2000年代初頭に一度宿泊したことがある。自分の研究



マヌク・ベイの肖像画

に関わる重要な条約が調印された場所に宿泊できることに感動し、部屋は簡素ではあるが木造の味わいのある雰囲気で大いに気に入ったのだが、いかんせん建物が老朽化していて水回りに問題があり、また、建物が大通りに面していることから夜間もうるさく、ほとんど寝られなかった。現在、ホテル業務はすでに終了し、レストランとしてのみ利用されている。

マヌク・ベイはブカレスト条約締結を見届けた後、1812年にロシア領となったベッサラビアのキシノウ（キシニョフ）に移り住み、1817年に死去した。彼は生前、キシノウから30キロ余り離れたところにあるフンチェシュティ（Hâncești）という町に広大な土地を購入しており、19世紀半ばに彼の息子たちがそこに屋敷を建設し、現在は博物館として一般公開されている。

このマヌク・ベイに関する研究は、1930年代と70年代にモノグラフが刊行されているものの、それ以降まとまった研究はなされていない。しかし、その後も論文は時々現れており、2018年にはアルメニアで国際会議も開催されるなど、このユニークな人物に関心を向ける研究者は常に一定数存在しているようである。筆者は、まだ本格的に彼についての研究には取り組んでいないが、以前よりこの人物に浅からぬ因縁を感じている。というのも、筆者は卒論で上述のアレムダル・ムスタファ・パシャを扱い、大学院では18世紀後半のワラキア・モルドヴァ両公国の問題をテーマとし、そして博士論文提出後はベッサラビア（現在のモルドヴァ）を含む黒海北岸地域も研究対象としている。別に彼の後を追いかけているわけではないのだが、研究を進める先には必ず彼の姿が見え隠れする。

オスマン帝国のキリスト教徒臣民が、帝国とヨーロッパ世界をつなぐという研究はこれまでも数多くなされているが、イスラーム信頼学という新たな枠組みの中でこのマヌク・ベイのような事例はどのように分析され位置づけられるのだろうか。いずれにしても気になる人物である。

昭和おじさん、デジタル・ヒューマニティーズに挑む

伊藤隆郎
神戸大学

スマホ・デビューが2020年という前近代アラブ史専門の昭和おじさんは、いかにしてデジタル・ヒューマニティーズと出会い、C01班「デジタル・ヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析」に潜りこんだのか。

デジタル・ヒューマニティーズ（人文情報学）が人文学に及ぼしつつある影響の大きさに私が気づいたのは、2018年暮れに参加したマドリードの研究集会でのことである。そこで、当時はウィーン大学所属だったMaxim Romanovさん（現ハンブルク大学・C01班研究協力者）が、人文情報学的手法を駆使した斬新な研究発表を行った。また、ドイツ・ザクセン州学術アカデミー主導のBibliotheca Arabicaの紹介もあり、その壮大な研究プロジェクトでも人文情報学が重要な役割を果たすと聞いた。これらの発表に衝撃を受けた私は、人文情報学との協働の必要性を痛感し、そのことを我らがC01班の研究代表者である熊倉和歌子さんに話したのだった（イスラーム信賴学News Letter, no. 2 (2022), p. 36参照）。ただし熊倉さんは、それが2017年の国際マムルーク朝学会の会期中、バイルートでのことだったと書いているが、たぶん記憶違いだと思う。人文情報学について彼女に「熱く語った」のは、マドリードの研究集会から半年後の2019年6月、同じく国際マムルーク朝学会の会期中ではあるが、バイルートならぬ早稲田の居酒屋でだったはずである。

それはさておき、C01班における私の研究の主要史料は、ハディース（預言者ムハンマドの言行に関する伝承）学者・歴史家のサハーウィー（1497年没）が編纂した伝記集『輝ける光』である。この伝記集は、著者の活動したエジプト、シリア、

ヒジャーズ中心ではあるが、東はインドから西はマグリブ・アンダルスに至る地域のヒジュラ暦9世紀（西暦15世紀）中に亡くなった名士たち、総勢約12,000名（正確な数は確認中、そのうち1,000名以上は女性）の伝記を収録し、刊本にして全12巻、総ページ数3,700ページ余りになる大部なものである。名前のアラビア語アルファベット順で配列されており、目当ての人物の伝記を探し出すことは容易にできる。しかしながら、アラビア語史料の刊本によくあることだが、索引が付されていない。そのため、例えば、ある人物が同書中の他人の伝記で言及されている、それを見つけ出すのは非常に難しい。地名や官職名、何らかの用語を検索する場合も同様である。

このように情報の宝庫でありながら利用しづらかった『輝ける光』であるが、デジタルテキストになれば、検索の問題は一挙に解決する。熊倉さんも紹介しているアラビア語文献のデジタルコーパスOpen ITI (Open Islamicate Texts Initiative) には、既に『輝ける光』が入っている。このデジタルテキストにタグを付けていけば、単なるテキスト検索だけではなく、さまざまな分析ができると喜び勇んだのだが、それも東の間だった。これも熊倉さんが書いているが、Romanovさんから、まず刊本とデジタルテキストをしっかりと照合するべきだと助言されて、それをやり始めたところ、デジタルテキストに次々と問題が見つかったのである。また、刊本の方もいろ

図1：Romanov, Maxim
“Algorithmic Analysis of Medieval Arabic Biographical Collections,” *Speculum* 92, no. 51 (2017), 5226-246より

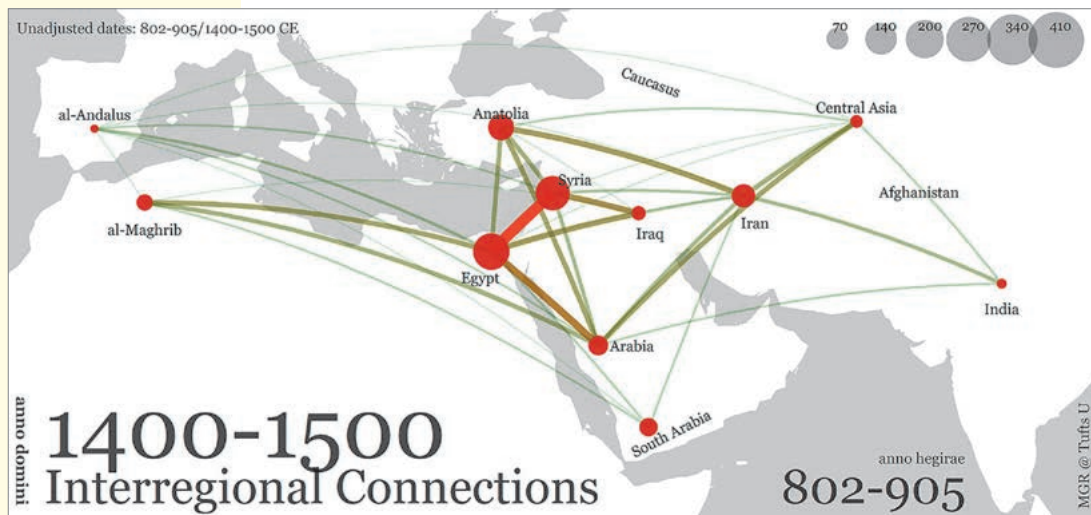




図2：サハーウィー『輝ける光』の刊本

図3：サハーウィー『輝ける光』のデジタルテキスト

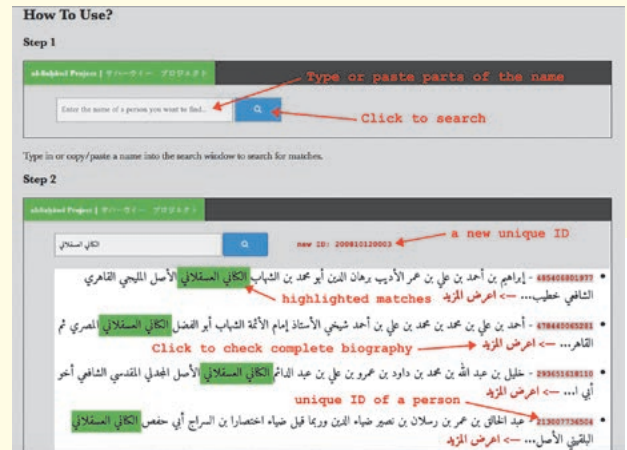
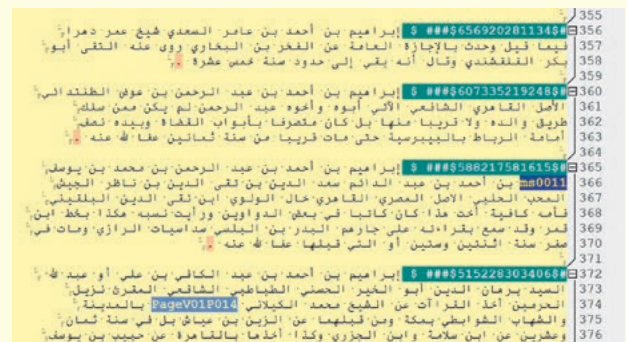


図4：サハーウィー・プロジェクトのためにMaxim Romanovさんがライプツィヒ大学のMasoumeh Seydiさんと作成してくれたウェブサイトより

いと問題含みであることがあらためて明らかになった。しかし、さしあたり刊本の問題点には目を瞑り、刊本に忠実なデジタルテキストを作成することにした。太田(塚田) 絵里奈さん(C01班研究協力者)と5人の学部生、大学院生の協力を得て、その作業を開始してから1年半余り、現在ようやく終わりが見えてきたところである。

そのようなわけで、『輝ける光』を人文情報学的手法で分析することは、残念ながらまだ十分にはできないのであるが、いくつかの単語をデジタルテキスト中で検索するだけでも、いろいろと発見がある。まず、アラビア語で「信頼」「信頼できる」を意味する *thiqa* を検索してみよう。64件ヒットする。この言葉はハディース学で伝承者を評価するためにも用いられるので、ハディース学者だったサハーウィーの著作にはもっと頻出するかと予想していたが、やや意外な結果である。だが、それよりも興味深いのは、女性を形容するのに *thiqa* が用いられていないことである。『輝ける光』に伝記が収録されている、ハディース学に関わった女性のほとんどは実は素人同然であり、長寿だったがゆえに伝承者として重宝されたに過ぎないと論じる最近の研究があるが、その見解を補強するものといえるかもしれない。

また、「私の信頼する人 *man athiqu bihi*」という表現が6件あり、いずれもサハーウィーに何らかの情報を「伝えた *akhbara*」「述べた *dhakara*」「語った *hakā*」者を指している。「信頼できる人が語った *hakā al-thiqa*」という似た表現も2件見られる。これらは、日本語の「信頼すべき筋」と同じ意味で、情報の出所を具体的に明かさない場合に用いられたように思われる。

次に、「コネクティビティ」を意味する *ittiṣāl* を検索すると、ヒット数は16である。そのうち半数の8件は、スルターンやアミールなど政治的な有力者やその縁者との「関係」を指している。どうやら *ittiṣāl* は、政治的な「コネ」を含意するようである。

以上は『輝ける光』を少し検索して得られた結果であるが、同時代のアラビア語伝記集や年代記はほかにいくつもあ

る。それらのデジタルテキストを横断的に検索して調べれば、これらの単語・表現の用法がサハーウィーに特有なのか否かを明らかにしたり、具体的な名前を挙げず情報の出所を明かさないのである。また、Romanovさんの助けを借りながら、熊倉さん、太田(塚田)さんと現在一緒に取り組んでいる通称サハーウィー・プロジェクトでは、『輝ける光』のデジタルテキストにタグ付けをして、名家の婚姻関係、学者たちの師弟やライバル関係、「商人」と呼ばれた人々の活動について分析する予定である。さらに、将来的には、他の史料も同様に分析することが考えられる。

このように、人文情報学的手法を利用することによって、さまざまな新しい研究の可能性が見えてくる。人文情報学は、熊倉さんが強調するように私たちの研究の手法だけでなく、研究の内容にも大きな影響を及ぼすのである。

振り返ってみて、イスラーム信頼学プロジェクトが始動する前に人文情報学の重要性について熊倉さんに話したのは、正解だった。私は信頼構築の「賭け」にまずは成功したらしい。あとは、彼女をはじめプロジェクトの関係者や他の研究者たちからの信頼を私がどれだけ得られるかにかかっている。そのことを肝に銘じつつ、研究を進めていきたいと思っている。

スマホ写真でつながる、そして運に頼る

石井正子

立教大学

スマホが普及し、誰でも写真が撮れるようになった時代。旅先やフィールドで、たまたま出逢った相手に、一緒に写真を撮ってくださいと言われたことはありませんか。スマホ写真を作るつながりについて考えてみました。



フィールドに長く滞在して帰国すると、あちらでフツーにやっていたことを、こちらでもやりそうになる。そんな体験をしたことはないだろうか。研究休暇を取得し、フィリピンで半年過ごして帰国したときのことである。久しぶりに職場の同僚と飲むことになった。楽しく飲んで帰ろうとしたその時、私の身体が突然、何か忘れている、、、とムズムズした。ああそうだ、スマホで写真を撮っていなかった！すかさず私の手は鞆のなかのスマホへと延びていった。が、次の瞬間、ここは日本だと気が付いて、その手をひっこめた。

私は「映える」料理の写真を撮りたかったのではない。同僚と一緒にセルフ写真を撮ろうとしたのである。フィリピンでは、職場でもプライベートでも人が集まればスマホで写真を撮る。集合写真では、まじめなポーズの写真を撮ったあとに、「ワキワキ〜」という声がかかり、和気あいあいとした写真を撮ることがお決まり事(写真)。ワキワキは和気あいあいが語源ではないのが、私にはなんだかノリやすい。バンサモロ・ムスリム・ミンダナオ暫定自治政府の高官のワキワキ版集合写真は平和を象徴する「ピースサイン」である

ことが多い。

フィリピンの人たちが小まめに集合写真を撮る様には、単に記憶を残したり、SNSで発信したりという以上の意味があると感じている。互いの親密な関係を確認することはもとより、たまたまその場で出逢った人とでも一緒に写真を撮り、フェイスブックのアカウントを交換することなどで、ゆるやかな関係性を作っておく。人とつながることへの積極的な姿勢が見て取れる。

例えば、私のフィールド訪問に海上警察8名が護衛についてくれたことがあった。訪問先は陸路では到達が難しいムスリムが大多数の地域であったが、彼らは皆クリスチャンであった。どんな思いで任務についているのか。知りたくて話しかけた。すると、彼らが「一緒に写真を撮りませんか？」という。「もちろん」といい、フェイスブックでも友達になった。

後日、そのうちの一人からメッセージがあった。「日本で3年間働いた経験があるイトコがいて、日本語もとても上手なのですが、今はフィリピンに戻っています。45歳独身です。もしあなたが日本に戻ったら、イトコの就職先探しを手伝ってもらえないでしょうか」と。

むろん私には、そのような伝手はなく、残念ながらお応えできそうもないと返事をしたが、チャンスに賭けてみるというその姿勢は相変わらずで、面白いと思った。たまたまの出逢いから、何かを依頼されるということは、デジカメもスマホもない時代にもあった。住所や電話番号を尋ねられ、渡すと、あとから何らかの依頼が舞い込むのである。スマホでの写真撮影とフェイスブックの友達承認は、その延長線上にある行為なのかもしれない。

生きていれば人はさまざまな問題に直面する。それを保障する公的制度が十分でなく、家族やコミュニティにも期待できない場合に、偶然めぐりあった人との運に頼ることが慣行するのだろうか。人生観や世界観に裏打ちされたものなのであろうか。その場合、リスクは想定済みなのだろうか。私はその場限りの人と人とのつながりや、そこから生まれる助け合いにも関心をもち始めた。

フィールドワークを始めた1990年代半ばには、私だけがフィルムカメラをもって人びとを映していた。それから約30年後には、私のほうが人びとから撮られる機会が多くなっている気がする。

〇〇に 埋め込まれた信頼

信頼関係やコネクティビティは、コミュニティのもつ伝統とどのように関わっているのだろうか。ここでは、ロシアと沖縄というふたつの事例をもとに考えてみたい。

まず磯貝は、イスラーム文化における人名録編纂の伝統という観点から、19世紀ロシアにおける人名録の編纂が共同体意識にはたらきかけてゆく事例を考察する。人名録とはウラマーの伝記の集成である。そこには各地方のウラマーの師弟関係やハディースの伝承過程といったウラマー社会の主要な関心事が重点的に記され、各地方の歴史

を預言者ムハンマドに連なるムスリム・コミュニティへとつなげるものであるという。かかる人名録編纂の伝統をもたないヴォルガ・ウラル地域においては、20世紀初頭にリザエッディンが編んだ『事績』と題する人名録が読まれることで、地域のウラマーの共同体意識がはぐくまれる契機になったと論じられる。

また平野は、イスラーム金融において利子（リバー）が禁じられている事実とは好対照をなす、コミュニティにおける信頼関係の存在が利子の前提となっている制度を取り上げる。沖縄の伝統的な庶民金融「模合」においては、グループのメンバーがお金を出し合い、その総額をひとりずつ順に取ってゆく。途中で誰かが持ち逃げすれば、模合は崩れる。受領の順番が後になるほど、崩れるリスクは高まる。この時、順番が後の人が受け取る利子は、受領順の不公平を調整する機能を果たしており、その根底には模合仲間間の信頼関係が存在していると平野は論じる。

前者の事例では、地域に存在しなかった共同体意識がムスリムの伝統である人名録編纂によってむしろ喚起され、後者の事例では伝統的制度の根底にメンバー間の信頼関係が存在している。コミュニティにおける信頼関係は、さまざまなかたちで伝統に結び付いていることが窺える。

荒井悠太



カイロ旧市街、アルハーキムのモスクにて
(2022年、佐藤将撮影)

人名録出版に埋め込まれた信頼

磯貝真澄

千葉大学

近代ロシアのウラマーが、ウラマーの人名録を編さんし、出版したことの意味を考えてみる。

それはロシアのウラマーのあいだの信頼構築に働きかけ、共同体意識を育てたのではないだろうか。

名前や経歴を出版物に掲載し、読者のあいだで共有する行為は、どのような意味を持つでしょうか。とくに、多くの人物の名前や経歴を収める人名録（伝記集）が出版物として、多くの読み手に届いた時のことを考えてみます。2020年代の私たちであれば、自分の祖父母や曾祖父母、親類の情報が載る場合、嬉しくないかもしれません。私たちは大量の本や新聞、雑誌に慣れきっていますし、出版物がウェブで公開され、名前で検索されるようであれば、自分の「個人情報」は掲載して欲しくない、削除して欲しいと考えるかもしれません。しかし、100年以上前のロシアのウラマー（イスラーム諸学を専門とする学者、宗教知識人）は、そうではなかったようです。

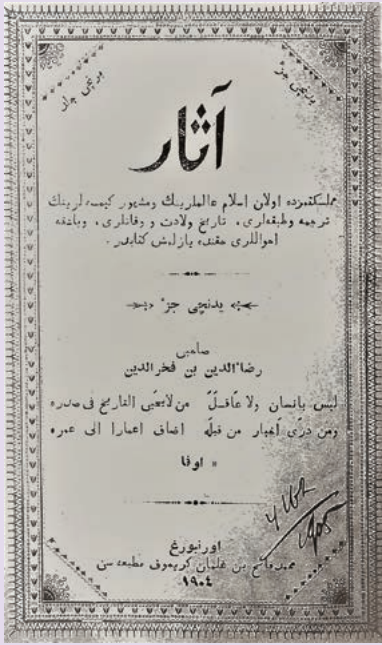
イスラームを信仰するコミュニティの歴史は7世紀に始まりますが、ウラマーは、その歴史の早い段階で現れました。神の啓示を伝える預言者ムハンマドが亡くなった後のアラブ・ムスリムの社会では、啓示の言葉を収集して選定し、書物の『コーラン』にまとめる作業が進められました。正統カリフのウスマーンによる事業です。この過程で啓示についての知識が蓄積され、またコーランに基づいて教義、法・道徳規範を研究する学者が増えていきました。

コーランだけでなく、預言者の言行であるスンナにも依拠し、規範を解明しようとする学者も増えました。スンナを言葉によって伝承するものが、ハディースです。ウラマーはハディースを収集して真偽を判断し、「真正な」ハディースを選別し、ハディース集を編むようになりました。ハディースは、誰がそれを語り伝えたのかを説明するテキストを備えます。つまり、『預言者ムハンマドが〇〇を行なった』と人物Aが言った、と人物Bが

言った、と人物Cが言った……』という構成をとります。ハディースの真偽の判断では、預言者ムハンマドとA、AとB、BとCの間に、実際につながりがあったのかが検証されました。こうした営為からは、ウラマーが知識の伝達の経路や系譜を重視する文化を持っていたことがよくわかります。

ウラマーは人名録も編さんするようになりました。8世紀には人名録が作られていたと言われますが、まとまって現存する最古の著作は9世紀のもので、ハディース学者の人名録、法学者の人名録といったように、学問分野ごとにウラマーの人名録が作られたりしました。10世紀後半からは、西アジアや北アフリカはもちろん、西はイベリア半島、東はイラン北東部や中央アジア西部にいたる広い地域で、人名録が主要な部分を占める地方史の作品が多く書かれました。それらはアラビア語で書かれた地方史の著作であって、かつ内容の8~9割方が人名録という構成のもので、森山央朗氏は、そうした著作のジャンルを「地方史人名録」と呼んでいます（森山央朗「地方史人名録：ハディース学者の地方観と世界観」、柳橋博之編『イスラーム 知の遺産』東京大学出版会・2014年所収）。多くの人名録には、1,000件とか5,000件といった圧倒的な数のウラマーの伝記記事が収録されました。したがって、1件あたり、つまりウラマー1名の伝記の記述内容は定型的で限られています。そこに重点的に記録された情報が、師弟関係の系譜やハディースの伝承の系譜なのです。ウラマー社会の、師弟の系譜、学統にこだわる文化が感じられます。

地方史人名録の人名録以外の部分は、その地方の由緒・来歴を物語るものですが、とくにそれを分析した森山氏は、地方史人名録が預言者ムハンマドのコミュニティ（ウンマ）とその地方を結びつける世界観を読み手に示すものだと述べます。たとえば、『ダマスカス史』では、この街のイスラーム以前の歴史の記述が薄い一方で、ムスリムによる征服は、ムスリムの視点から記述されます。ムスリムによる征服とは、イスラームの到来です。



リザエッディン・ブン・ファフレッディンが出版した『事績』第7分冊の標題紙 (Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn, *Āthār*, vol. 1, no. 7, Orenburg, 1904)



オスマン知識人風の装いをしたリザエッディン・ブン・ファフレッディン、1892年撮影とされる (Ризаэтдин Фәхретдин: фәнни-биографик жыентык. Казан: Рухият, 1999)

地方史人名録は、その地方のイスラーム到来以前と以後を切り離し、その地方を預言者ムハンマドのコミュニティにつなげるとともに、その地方の歴史の起点をイスラームの到来に定める、そうした世界観を示す——森山氏は、そう指摘します。ウラマーの人名録は、13世紀後半以降、シリアやエジプトなどのアラブ地域以外ではあまり書かれなくなりました。

さて、19世紀末～20世紀初頭のロシアでは、リザエッディン・ブン・ファフレッディンというウラマーが『事績』という人名録をテュルク語で著し、出版しました。彼の出身・活動地域であるヴォルガ川の中・下流域やウラル山脈の南麓は、テュルク諸語を使うムスリム（現在のタタール人、バシキール人）が集住し、10～11世紀にはイスラーム信仰が広がっていたと考えられます。16世紀後半にロシアに併合・編入された後もイスラーム信仰とムスリムのコミュニティは維持されました。ただし、ウラマーの人名録が書かれた形跡はありません。もっとも、それはそれほど不思議ではありません。この地域のウラマーはコーカサスや中央アジアに遊学していましたが、そうした遊学先でも、ウラマーの人名録は作られていませんでした。ようするに、リザエッディンは、自分の地域には人名録を書く伝統がないのに、イスラーム中世にアラビア語で書かれた人名録を意識して『事績』を書き、出版したのです。しかも、彼が『事績』に伝記記事を書いた1人めの人物は、ヴォルガ中流域でイスラームを受容したブルガル国家に、アッ

バース朝カリフから派遣された使者のイブン・ファドラーンです。それは10世紀前半のことでしたが、つまり、『事績』はこの地域のイスラーム化を最も重要な出来事と認め、ウラマーの系譜をアッバース朝につなげようという世界観を提示していると言えます。そこからはもちろん、預言者ムハンマドのコミュニティにつながるでしょう。

『事績』が15分冊に分けられ、1900～08年にカザン市とオレンブルグ市で出版され始めると、リザエッディンのもとには読者から手紙が届きました。この地域のウラマーが『事績』を読み、自分の師匠や一族（ウラマーの家系）の系譜を書き記した伝記記事を『事績』に収録して欲しいと考えたためです。これは単純に、名士録に掲載されたいという、いくら品のない意欲にも見えます。とはいえ、これまで述べてきた人名録の世界観を踏まえると、それとは別の心情を推測してもよさそうです。『事績』に収録されれば、この地域のウラマーの系譜に連なる者として、イブン・ファドラーンを経由し、預言者ムハンマドのコミュニティにつながる感覚が得られます。あわせて、出版物である『事績』の内容は、読者であるウラマーのあいだで共有されるのです。彼らはたがいに面識がなくても信頼感を抱き、仲間意識を持ち始めたのではないのでしょうか。どうやら『事績』は、この地域のウラマー社会における信頼構築に働きかけ、その共同体意識——イスラーム初期時代のウマとのつながりもある——を育てるという一面を持っていたと言えそうです。

利子に埋め込まれた信頼

沖縄の模合（頼母子講）から考える

平野(野元) 美佐

京都大学

利子には、どこかよそよそしく冷たいイメージがある。高利貸は世界中で嫌われてきたし、イスラーム金融では利子の徴収が避けられている。しかし、沖縄の庶民金融「模合」の利子からは、異なる姿がみえてくる。

頼母子講や無尽講と呼ばれる庶民金融は、日本全国で20世紀前半頃までありふれたものだった。しかし、銀行など近代的な金融機関が発達するにつれ、その多くは姿を消した。沖縄県は例外で、全県において模合と呼ばれる庶民金融がまだまだ活発に行われている。その仕組みを簡単に説明する。何人かでグループをつくり、全員が定期的に現金を出し合い、その総額を1人ずつ順番に取っていく。たとえば、12人のグループで毎月1万円ずつ出し合い、総額12万円を1人ずつ順番に取る。1年で1巡するのでそこで解散しても良いが、多くのグループはふつつ何巡も(何年も)続ける。先の例では、最初の受領者は自分の出した1万円を除けば11万円を借りるようなものであり、最後の受領者は12万円の貯金をおろすようなものである。最初と最後の受領者以外は途中で貸し手にも借り手にもなるが、多くの人は誰に借り、誰に貸しているとは考えない。模合を「借りる」ではなく「取る」と言うのにも、その考えが表れている。

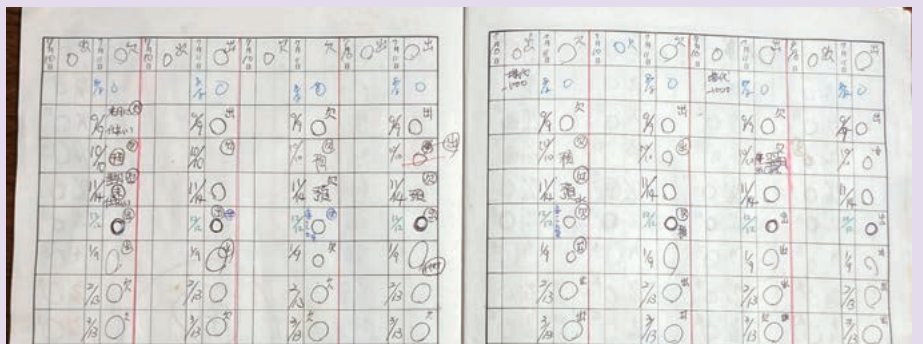
庶民金融と説明したが、集められるのは貨幣とは限らず、古くは米や茅などでも行われていた。つまり、相互扶助の性格が強いのである。高校も大学もないような沖縄の離島では現在も、「子どもが進学するから」といった理由で模合を起こす。しかし現在の模合の多くは、定期的に現金を集めるその拘束力を利用し、毎月飲食店などに集まり親睦を深めることを目的としている。このような親睦模合の毎月の支払いはたいてい1万円程度で、ふつつ利子はない。

しかし、3万円以上の模合になると、利子をつけるグループが増える。一番高い利子を付けた人が落札する入札式もあるが、利子が高額になりがちなため、親睦・相互扶助を目的とする模合では利子を定額にすることが多い。たとえば5万円×10人の模合なら、50万円を受け取ったメンバーは翌月から定額の利子(たとえば1,000円)を付け、5万1,000円を最後まで毎回支払う。つまり、最初に取り手は早く50万円を受領できるが、9,000円(1,000円×9回)を利子として余分に出さなければならない。逆に、最後に取り手はその9,000円分を利子としてもらうことができる。この仕組みの特徴は、先に取り手人が支払う利子が、そのまま後に取り手の利子になるということである。この仕組みは単純だがよく出来ている。取る順番が後になるほど支払う利子は漸減し、もらえる利子は漸増するからである。こうして、模合における受領の時間

写真1：おカネを受領する。首里の親睦模合でのワンシーン。(撮影 平野美佐)



写真2：市販の「模合帳」を使った親睦模合の記録(2012年～2013年)。個人情報が入っている下部はカットしている。沖縄ではこのような「模合帳」が文房具屋などで購入できる。(撮影 平野美佐)



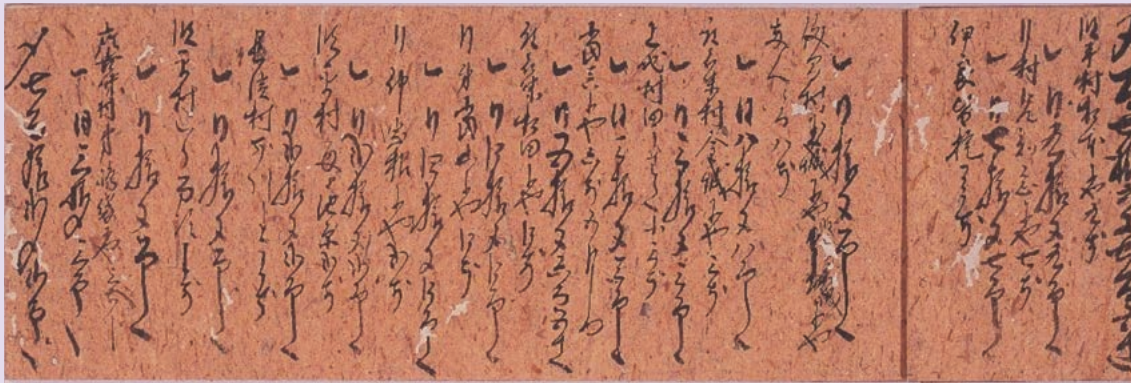


写真3：光緒6（1880）年のものとされる模合帳。本文中でとりあげた「模合請取証文」とは異なる方法で行われている。（出典：『模合帳一』仲原善忠文庫 NA020 琉球大学附属図書館所蔵，<https://shimuchi.lib.u-ryukyuu.ac.jp/collection/nakahara/na02001>）

的不公平が細やかに調整されているのである。

沖縄の模合の古い記録は沖縄戦で焼失するなど、多くはない。数少ない模合関係書類のなかでも、19世紀の「模合請取証文」は当時の模合の利子について考えることができる貴重な資料である（宜野湾市史編集委員会 1985: 264-271; 那覇市企画部文化振興課 1989: 625-627）。この証文の模合が行われていた場所は沖縄中南部と推定され、年代については、その人名や位階の表記から1820年～70年代と推測されている（宜野湾市史編集委員会 1985: 266）。一連の証文は、模合の責任者が毎月の受領者に署名させた領収書のようなものと考えられている（高良 2006: 180-181）。一つ一つの証文には、受領金、日付（ただし年は干支しか書かれていない）が記され、取主（受領者）と3人の口入（保証人）の署名、押印（か拇印）がある。興味深いのは、証文にはその受領者が何番目で、模合が終わるまであと何人残っているのかが記載されていることである。これにより、模合が全体で87回にもおよび、証文群は54～66回目（13回分・ただし2人で半分ずつ取っている回があり、証文数は14）の記録であることがわかる。毎月5日に行われていたため、87回とは87か月であり、終わるまで7年以上かかっている（宜野湾市史編集委員会 1985: 264-266; 高良 2006: 177-179）。

注目したいのは、受領金が回を重ねるにつれ1貫文ずつ増えている点である。この模合は毎月5貫文ずつ出し合い、その総額を一人か複数人に取りらせ、受領者は当月から1貫文の利子をつける仕組みであったと考えられる。残っている証文から前後を補うと、初回の受領者は436貫文を、最後の受領者は522貫文を受け取っている。その差は86貫文で、最初の受領者はこの金額を利子として毎月支払い、最後の受領者は利子として毎月受け

取ったことになる。年利は約7%であり、現在のフリーローンと比べても高利ではない。436～522貫文がどれだけの価値を持ったのかは今後の課題としたいが、7年がかりの模合であることから、かなりの大金だったと想像できる。最初のほうの受領者が田畑を買えば、7年間に何度も収穫できたであろうし、家畜を買えば、成長し子どもを生んだりしたであろう。だからこそ現代の模合と同様に、定額の利子をつけ、先に取り取る人と後に取り取る人の不公平を調整していたのである。

現在の模合では、初めのほうで取って利子を支払うより、なるべく後ろのほうで取りたいという人が多い。後のほうで取れば、ほぼゼロ金利の銀行預金より高い利子が付くから当然かもしれない。しかし、順番が後ろになるほど増えるリスクもある。模合崩れである。先に取った人が支払えなくなる、持ち逃げするなどのリスクは、高額な模合になるほど大きくなる。沖縄県では過去に何度も、「ゴロゴロ模合」の名で知られる高額模合の連鎖倒産が起こっている。模合の集会で、そのような苦い経験を語る人もいる。そう考えると、後から取る人が模合にカネを出すこと自体、先に取り取る模合仲間への信頼を表しているのである。よって、先に取り取る人が後の人へ支払う利子には、自分を信頼しカネを託してくれた仲間に対する感謝や、先に取り取ることへの気遣いが含まれている。そして、受け取る側にとっての利子とは、受け取った仲間がその信頼の証であるカネを有効利用し、還元してくれたものなのである。

このように、模合でやりとりされる利子には、模合仲間の信頼が埋め込まれているといえよう。付け加えれば、模合崩れにならないように、もともと信頼できる人同士がその信頼を強化していけるような模合が、よい模合なのである。

引用文献

- 宜野湾市史編集委員会（編）1985「七『琉球資料』九三所収の証文類」『宜野湾市史宜野湾関係資料』第4巻資料編3、pp. 264-313。
- 高良倉吉 2006「近世末近代初頭の琉球における模合請取証文について」『日本東洋文化論集』（琉球大学法文学部紀要）第12号、pp. 169-186。
- 那覇市企画部文化振興課（編）1989「模合請取証文・他」『那覇市史』資料篇第1巻10 琉球資料(上)、pp. 625-648。



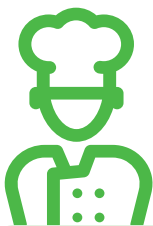
「信頼学のキッチン」 活動報告

「信頼学のキッチン」はイスラーム信頼学・総括班の企画として、参加者それぞれの持つ専門分野や題材、方法論から、「コネクティビティ」と「信頼」という共通のテーマを考えるためのセッションです。

趣旨

毎回、下記に基づく話題提供を募り、全員参加型のディスカッションを行なっています。

- ・「つながり」を考える素材・題材の紹介
- ・ネットワーク論、信頼論など、先行研究のレビューと自身の研究への応用可能性
- ・学会参加・調査報告
- ・「コネクティビティ」解明に向けた新手法の提案 など



学会発表や論文などのアウトプットの前段階で「素材」や「調理方法」をめぐり、お互いのアイデアを磨き合う場として「キッチン」は始動しました。フラットな関係性のもと、参加者全員の自由な発言を前提とするため、「発表」ではなく「セッション」と呼んでいます。それによって個別研究の集積にとどまらず、「コネクティビティと信頼“学”」としての考察を深めていき、最終的にはワークショップやポスター報告など、何らかの形で成果を公開することを目指しています。2022年10月に始動し、これまで月に1~2回程度のペースでセッションを重ねてきました。

活動報告

第一回

「素材を得る」

2022年10月1日 (土) 10:00-12:30

- ・趣旨説明
- ・参加者の自己紹介／「コネクティビティ」及び「信頼」をめぐる研究視角等
- ・エジプト・アラブ共和国・史料調査報告
アラブ連盟大学写本研究所
太田 絵里奈 (東京外国語大学AA研)
エジプト国立図書館・文書館
藻谷 悠介 (大阪大学)

第二回

「素材と方法」

2022年10月22日 (土) 10:00-13:00

- ・今後のアウトプットについて
- ・史料調査報告
オスマン文書館・イスラーム研究センター (ISAM) 図書館
ヴェネツィア国立文書館
相磯 尚子 (慶應義塾大学)
- ・最新版デジタル・ヒューマニティーズの応用可能性
DIGITAL HUMANITIES 2022 参加レポート
出川 英里 (千葉大学)



エジプト国立図書館・文書館 (カイロ、2022年8月太田絵里奈撮影)
向かって左が図書館、右が文書館。中間のブックストアで校訂本や関連書籍が販売されている。

イスラーム研究センター (ISAM) 図書館・外観
(2021年1月相磯尚子撮影)



イスラーム研究センター (ISAM) 図書館・閲覧室 (2021年6月相磯尚子撮影)
コロナ対策のため、閲覧室は従来の席数の四分の一に間引きされている。



ヴェネツィア国立文書館 (2022年9月相磯尚子撮影)
写真左側の建物が文書館の入り口。

第三回

「信頼の理論」(グラノヴェター特集①)

2022年11月14日 (月) 10:00-12:00

- ・今後のアウトプットについて(ブログ記事、ポスター・セッション企画)
- ・「信頼」を考える理論のレビューと研究への応用可能性

嘉藤 慎作(東京外国語大学AA研)

マーク・グラノヴェター(著)、渡辺深(訳)『社会と経済：枠組みと原則』(ミネルヴァ書房、2019年)第3章「経済における信頼」(67-108頁)

第四回

「“開発主義”と信頼」

2022年12月20日 (火) 10:00-12:00

- ・開発と経済から国家に対する「信頼」を考える
高橋 信哉(東京外国語大学)

Graham Harrison, *Developmentalism: The Normative and Transformative Within Capitalism*, *Critical Frontiers of Theory, Research, and Policy in International Development Studies*, Oxford University Press, 2020.

第五回

「異文化接触における信頼」

2023年2月3日 (金) 10:00-12:00

- ・「信頼」の定義／分断を乗り越える戦略知としての海洋秩序
- ・近世地中海及びインド洋世界における海賊対応にみる「信頼」

嘉藤 慎作(東京外国語大学AA研)

末森 晴賀(北海道大学)



アラブ連盟大学写本研究
所(カイロ、2022年8月太田絵里奈撮影)
所蔵するマイクロフィルムはオンラインで検索・複写請求が可能。

学問を山に喩えるならば、頂上に至る道は数多く存在し、その途中行き止まりにぶつかることもあるでしょう。しかし、私たちは「この行き方ではうまくいかなかった」という経験を共有することにも大きな価値があると考えています。通常、学会やワークショップでは、登山に「成功したケース」しか提示されませんが、自分では行き止まりに感じていても、他の登山者の知恵を借りれば、突破できる方法や、別ルートが見つかるかもしれません。

「信頼学」をめぐる様々な登山ルートを開拓し、自身の研究を俯瞰的に捉える—この目的に沿ったものであれば、どのような話題でも歓迎いたします。今後も「素材」と「方法」を持ち寄り、参加者全員でつながりや信頼構築を考える機会を設けていきます。参加を希望される方は下記までご一報ください。

【お問い合わせ先】 太田(塚田) 絵里奈(東京外国語大学AA研)
e.otatsukada@aa.tufs.ac.jp

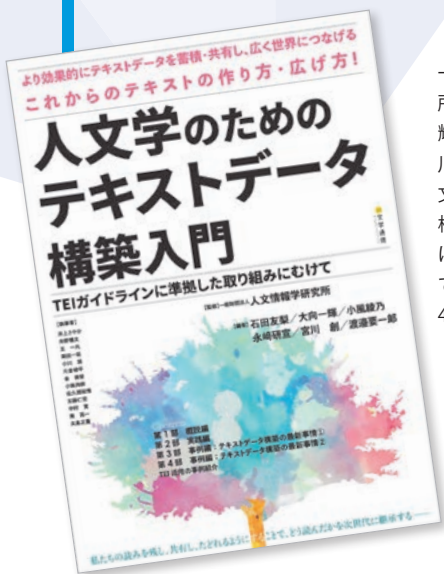


出川英里 千葉大学大学院・博士後期課程

“ 人文情報学（デジタル・ヒューマニティーズ）の手法を用いた研究を行う上で、テキストデータは欠かせない存在である。では、様々な場面で利用しやすいテキストデータを作成するためにはどのようにすればよいのだろうか。この疑問に答えてくれるのが本書である。 ”

人文学のためのテキストデータ構築入門

TEIガイドラインに準拠した取り組みにむけて



一般財団法人人文情報学研究所（監修）石田友梨／大向一輝／小風綾乃／永崎研宣／宮川創／渡邊要一郎（編）『人文学のためのテキストデータ構築入門 TEIガイドラインに準拠した取り組みにむけて』（文学通信、2022、B5判、424頁、3,000円）

人文情報学の分野では、テキスト分析やテキストに含まれる情報の可視化が盛んに行われている。しかし、これらの研究に取り組む前提として、分析対象とする文字資料がデジタル化されている必要がある。したがって、テキストデータの構築は人文情報学の基盤ともいえるだろう。

本書はテキストデータの構築やその利用に関心がある人に向けて、利便性が高く共有しやすいテキストデータの作成手法を紹介する入門書である。その手法として、TEI (Text Encoding Initiative) ガイドラインに準拠したタグ付けによるテキスト構造化が取り上げられる。まず、本書の記述に沿ってタグ付けやTEIについて説明しておこう。タグ付けとは、例えばテキストデータ中の夏目漱石という文字列に対して、人名を示す <persName></persName> という記号をつけることで、「夏目漱石」は人名であるという情報を与える作業である。テキスト中の全人名にこうした処理を施せば、タグに基づき人名を一括して抽出できるようになる。また、タグ付けによりテキストを外部データとリンクさせることもできる。タグ付けはテキストデータに付随情報を盛り込んでいくことといえる。そして、TEIガイドラインとは人文学研究のための国際的なタグ付けルールである。

これに依拠することで、テキストデータの共有や処理がしやすくなる。ただし、ルールといっても様々な種類のテキストに対して画一的なタグ付けを定めるのではない。TEIガイドラインでは個々の資料特性や各分野の研究方法を尊重しつつテキストデータの汎用性を高めることが目指されている。TEIを適用するかどうか、適用の程度の判断も利用者に委ねられる。

本書は概説編、実践編、事例編①、②の4編からなる。各編の内容をごく簡単に紹介すると、概説編ではテキストデータ構築の基本的な考え方と日本での取り組みの歴史が説明される。実践編はTranskribusなどの手書き文字認識ソフトウェアの使い方とTEIに沿ったタグ付けのチュートリアルである。事例編ではTEIを用いたテキストデータの構築・利用・公開に関する研究が紹介される。各研究では日本古辞書、伝記資料、財務史料、アラビア語テキスト、漢文仏典へのTEI適用やデータ可視化手法が論じられる。TEIの利活用例を知りたい人は、まず事例編を眺めてみるのもよいかもしれない。

さらに、本書ではテキストデータ構築がテキストの解釈を残していく行為であるという考え方も示される。例えば、「あなた」という人称代名詞が誰をさすかという情報がタグ付けて付与できる。これはテキストの解釈に関わるものであり、正確なタグ付けのためには資料自体への深い理解が必要とされる。本書を通じて、テキストデータ構築は、資料に関する専門的な知識を、より多くの方が分かるように残し、共有していくための一つの方法であると気づかされる。加えて、事例編では人文学と情報学の専門家が共同してプロジェクトを進めることの重要性も指摘される。異なる分野の専門知識を持ちよりながら、そこから得られる知見をより広く分かち合おうとするテキストデータ構築の取り組みは、イスラーム信頼学が目指すところと重なるのではないだろうか。

このように、本書は非常に充実した内容の一冊であるが、本格的にテキストデータ構築に取り組もうとするならば、それぞれの資料に適した手法をさらに学んでいく必要がある。本書でも述べられているように、TEIガイドラインの策定はもともと欧米圏の学術コミュニティから始まった動きであり、非欧米圏の多様な資料への対応は今まさに課題となっている。そのため、実践においてはTEIガイドラインでは対処できない場合も生じるかもしれない。しかしながら、まずは第一歩を踏み出すことが大切である。本書はこれからテキストデータ構築やそれを利用した研究を始めようとする人にとって、よいガイドブックとなるだろう。

シビルダイアログ・キャラバン 「空と海がつなぐ世界」報告

太田(塚田) 絵里奈

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

総括班は、昨年度に引き続き、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）、世田谷代田 仁慈保育園と共催で、シビルダイアログ・キャラバン企画「空と海がつなぐ世界」（10月24日～11月13日）を実施した。



会場レイアウト



【ポスター図版出典】

Olaus Magnus, *Carta marina*, 1539.

Johann Bayer, *Uranometria*, 1603.

Frederik de Wit, *Planisphaerium Coeleste*, 1670.

Jehoshaphat Aspin, *Urania's Mirror*, 1824.

1. 信頼学的アウトリーチ活動

イスラーム信頼学では、学術成果の社会への還元を目指す一連のアウトリーチ活動を「シビルダイアログ・キャラバン」と呼んでいる。ここで「ダイアログ」という語を用いているのは、これまでのアウトリーチ活動において主流であった講演会やシンポジウムのように、研究者側から一方的に情報を伝達するのではなく、成果発信をイベントの参加者との対話形式で行ない、キャラバンのように実施場所を変えて精緻化することで、我々も新たな視座や学びを得たいという意図からである。

近年、「サイエンス・コミュニケーション」という言葉が普及し、学知の「社会との共創」が新時代の学知にお

ける重要なキーワードになっている。このような学問を研究者間で自己完結させず、社会との接合を模索することで発展させるという発想は、昨年度に本企画を立案した段階からさらに浸透した印象がある。厳しさを増す研究環境に対する危機意識を背景に、実学的な成果発信からは遠い（と少なくとも思われてきた）人文社会系の学問においても、これまでにない手法でその魅力を広く発信し、価値を社会に認知してもらうことが一層求められているといえるだろう。

だが、人文社会学、特に海外を対象とした歴史・地域研究においては、その具体的な実践例に乏しく、ほぼ手つかずの領域である。「学知の共創」を流行語として終わらせてはならず、またこれまでも行なわれてきた成果還元活動の、単なる看板の付け替えであってもいけない。そして信頼学が「学術変革領域研究」を名乗る以上、未来のアウトリーチ活動における指標を示したい。人文知を「共に創る」とはどのようなことなのか、それには何が必要なのか。方法論、場所、対象、内容……全てにおいてゼロから考える必要があった。

2. 新たなる試行錯誤

依然として厳しい状況に置かれている人文社会系の学問であるが、追い風もある。その一つは、2020年以降、小学校から高校まで順次施行された文部科学省の「学習指導要領」の改訂であり、何を学ぶかに加え、どう学ぶかという、プロセススペースの探求型学習が新設された。ウェブから無限に情報が手に入るデジタル・ネイティブの世代にとって、自身で問題を設定し、大

量の情報を取捨選択し、そこに意味や価値を付与していく作業（キュレーション）が意識されるようになった。もう一つは内閣府の推進するシチズンシップ教育である。学びを教室内で完結させず、地域社会の構成員としての意識を育み、社会問題の解決に向けて企業や地域組織などと連携する動きである。このような問題解決に向けた自発的な思考を促す教育方針への転換により、研究者側も「教える（＝正解を出す）」という従来のアウトリーチ活動にとどまらず、ともに思考し、学びを展開させる機会を提供することが求められている。

それでは、「コネクティビティ」と、そこに介在する「イスラーム」という信頼学としてのコンセプトに基づく、「学術変革」の名にふさわしい、双方向性ある成果還元とはどのようなものか。昨年、一つの試みとして出した形は、保育施設を舞台に、大人から子どもまで、主催者側で対象者を限定しな

い、対話形式でのアウトリーチ活動（「動物がつなぐ世界」）であった。すべてが手探りであった昨年度の反省をもとに、もう一度同様の形態で実施することで、今後の課題を洗い出したい。そのような意図から、今年度も共催、すなわち「パートナー」として、AA研、そして世田谷区の認可保育園である世田谷代田 仁慈保幼稚園に協力を要請し、実現したのが本企画「空と海がつなぐ世界」である。

3. 「空と海がつなぐ世界」

今年度は企画全体のテーマを天文学と地理学の東西伝播と発展の歴史に据え、全世界的な視座から、つながりの「潤滑油」としてイスラームが機能している側面を描く内容とした。企画は①在園児向けワークショップ、②親子講座、③パネル展示、④参加型企画という昨年度と同様の構成に加え、新たに、保育園の先生方とAA研スタッフを中心に、冒険と発見にまつわる推薦



展示解説ツアー（11月8日）

本（「押し本」）を集め、冊子として配布した。

①在園児向けワークショップ（「なぞのしょくぶつ わくわくの実」：10月24日・25日・28日、3クラスで実施）

北アフリカ出身の地理学者イドリースィーの円形地図（12世紀）を取り上げ、そこに描かれる謎の島「ワークワーク」に育つという植物を、断片的な文字情報に基づき創作するワークショップである。

②親子講座（「おはなし会&ワークショップ」：11月5・6日、全3回）

親子講座は保護者同伴となるため、在園児向けワークショップよりも「探求の余白」を残す構成とした。古地図の紹介・地図の活用に関する歴史を増補した「なぞのしょくぶつ わくわくの実」と、天文学の発展史（「ほしがつなぐものがたり」）の二本を行なった。そしてこれらの「おはなし」を通じて得た気づきや関心を、続くワークショップで形にするという二段構成をとった。

③展示「空と海がつなぐ世界」（11月5、6、12、13日、公開）+展示解説ツアー（11月8日、3クラス）

天文学の歴史と東西伝播・古代の世界観（「空がつなぐ世界」）、大航海時代以降の地理認識の変容（「海がつなぐ世界」）、地理情報システム（GIS）を通じた現代の地図利用（「地図がつなぐ地域」）という三つの観点を軸に構成した。世界地図が精密になる過程のなかで、日本がいかに描かれてきたか



在園児向けワークショップ「なぞのしょくぶつ わくわくの実」（10月28日）



大型世界地図



おはなし会「ほしがつなぐせかい」
(11月6日)作品



子どもたちから寄せられた作品(わくわくの実)

も併せて紹介した。11月8日には皆既月食にちなみ、在園児を対象とした展示解説ツアーを行なった。

④参加型企画(ハンズオンスペース・大型地図)

自ら学びを広げる空間と位置づけ、関連図書、AR地球儀などの資料を設置した。大型の世界地図は、来場者に空や海に関するエピソードや調べた内容を各所に貼ってもらうことで、経験や学びを共有してもらう空間とした。

4. 持続的な「対話」に向けて

二年目を終えて、本企画に「成果」があるとすれば、まずは幅広い層にリーチできたという点だろう。今年度はワークショップの回数を減らしたうえ、天候にも恵まれなかったが、来場者、参加者は延べ1,000人を超えた。多くの方に足を運んでいただき、企画参加によって展示内容が充実していったという結果は、「シビル」と「ダイアログ」という言葉の双方に合うものであったと思う。

来場者の動線を観察すると、ほとんどの方が最奥部の世界地図に足を止めていた。寄せられたメッセージカードの内容は、AA研スタッフによる学術的なものから、世界を旅した思い出、保育園の先生方のお勧めスポット、子どもたちが寄せた豆知識など、多岐にわたっていたが、学びや記憶を共有するという企画趣旨が支持を集めていることを感じた。

試行錯誤で終わった一年目とは異なり、今回強く感じたのは、継続的に実

施していくうえでの課題である。今後も幅広い層へのリーチを前提にするならば、実施場所は大学キャンパスに限定しないほうがよい。舞台となった世田谷代田 仁慈保幼園は、小田急線線路跡地の再開発の一環として、「地域共生」の拠点としての役割も帯びている。このような特色ある園だからこそ本企画を受け入れてもらえたが、子どもたちの安全を確保しつつ地域社会に開放することに対して理解と協力を仰げる、キャラバンとしての開催場所を探っていかなければならない。

また、実施形態においても大きな課題が浮上することとなった。信頼学のコンセプトに基づき企画全体のテーマを設定する以上、それに沿った各企画を統括する運営上の負担が大きくなる。加えて、おはなし会は一方向的に話して終わり、ではない。参加者と「探求」し、その成果へのフィードバックまで含むと、ある程度の期間が必要である。展示を省略すれば負担は軽減されるが、すべての人に開かれた、「つながり」を考える場は設けるべきではないか。さらに「共に創る」ことを前提にしたアウトリーチ活動には無限の時間と労力が要求されるにも関わらず、社会貢献とはみなされても、研究活動の一環としては十分に評価されていない。今後も双方向性ある企画を継続するために、これらの課題を踏まえつつ、多くの研究者が参加しやすい形態を模索していきたい。

シビルダイアログは、みんなで作る企画である。今回も、参加者全員で人

類の歩みを振り返り、正解のない問いに向き合うことを目指した。だが、子どもはつまらない話は聞いてくれない。手抜きはすぐに見破られる。だからこそ話題を提供する際には、「学問って、こんなにおもしろいんだ!」という研究者としての原点に立ち返り、誰よりも楽しんで話すことが、アウトリーチ活動における最も重要な姿勢だと、二年間の試行錯誤を通じて確信するに至った。文字通り全力を尽くして走り切った後に、参加した子どもから「わくわくの実、楽しかったよ!」と声をかけられたことは、何よりの労いであった。今年度も本企画のパートナーとしてご尽力くださった世田谷代田 仁慈保幼園の先生方、そして企画の主役として、目の醒めるような意見や創造性に満ちた作品を寄せてくれた子どもたちに、心からの御礼を申し上げる。

シビルダイアログ・キャラバン 作業部会

野田仁・熊倉和歌子・
太田(塚田)絵里奈・佐藤将・
本田直美(AA研)
村瀬智子(イスラーム信頼学事務局)

展示解説文:
太田(塚田)絵里奈・嘉藤慎作・佐藤将
ワークショップ講師・展示解説:
太田(塚田)絵里奈
ポスター・パネルデザイン: 本田直美

運営ディレクション:

菊地みぎわ・
根本京子(世田谷代田 仁慈保幼園)

「イスラームからつなぐ」 の刊行始まる

本プロジェクトの成果公開の一環として、シリーズ「イスラームからつなぐ」全8巻を東京大学出版会より刊行します。

広い意味での「イスラーム」に関わる研究者が、コネクティビティ（つながり、つながりづくり）と「信頼」をキーワードにしつつ、1400年間にわたるイスラームの拡がりの歴史と現在の状況のなかに、排除と分断に対抗する知を見つけ出すことを狙いとしています。ただし、イスラームの教義から出発して演繹的考察を深め、イスラーム文明の独自性を結晶化させる、という方法はとりません。

逆に、研究者が取り組んできた過去と現在のイスラームをめぐる多様な時空間から、学知のみならず、暗黙知として認識してきたような「つながりづくり」の知恵と技術を抽出することを試みます。そしてそれを不信と分断をのりこえるための戦略知として鍛え上げることを目指すものです。

イスラームという宗教は、ともすれば排他的で分断を推し進めているではないか、と見られがちです。もちろん、現在18億といわれる人口規模をもつムスリムもまた、排除と分断を経験し、苦しんでいます。しかし長い目で見れば、イスラーム文明はこれまで多様な集団や文化を包摂してきたのであり、コネクティビティと信頼構築のための知恵と技術の宝庫であると、私たちは考えています。

本シリーズ名の「イスラームからつなぐ」には、コネクティビティと信頼の両方の意味が込められています。その戦略知を様々な形で伝えたいと思います。そしてイスラームのみならず、他のさまざまな分野や領域とも相互につながあうことをめざしています。

次のような構成で、第1巻は総括班メンバーを中心とした執筆陣、第2巻以降は各計画研究班を中心とした企画内容になっています。

第1巻 『イスラーム信頼学へのいざない』 黒木英充・後藤絵美編

第2巻 『貨幣・所有・市場のモビリティ』 長岡慎介編

第3巻 『翻訳される信頼』 野田仁編

第4巻 『移民・難民のコネクティビティ』 黒木英充編

第5巻 『権力とネットワーク』 近藤信彰編

第6巻 『思想と戦略』 山根聡編

第7巻 『紛争地域における信頼のゆくえ』 石井正子編

第8巻 『デジタル人文学が映し出す名士たち』 熊倉和歌子編

第1巻は、高校生や大学に入学したばかりの学生を読者に想定して、可能な限り平易な記述を心がけており、2022年度末（2023年3月）に刊行の予定です。第2巻以降の編者が全員執筆陣に入っており、シリーズ全体を俯瞰できるような形になっています。第2巻以降は、いわゆる学術書の形をとりますが、計画研究班以外からも執筆者をお迎えし、研究の最前線の魅力をわかりやすくお伝えしたいと考えています。

イスラーム文明や現代のムスリムたちの文化や社会のなかに見出される知恵と同じような知恵が、他の文明のなかにも見出されるかもしれませんし、イスラームならではの特徴的な性格にも気づくかもしれません。シリーズを通して、こうした発見をして頂ければと思います。



第1巻

『イスラーム信頼学へのいざない』

黒木英充・後藤絵美（編）
（東京大学出版会、2023年、定価4,180円（本体 3,800円+税））

「イスラーム的コネクティビティに基づいた信頼構築」とはいかなるものなのか。「つながり」をキーワードに、イスラーム文明の歴史と今日の世界における意味をとらえ直すための視座を提示する。さらに研究現場での気づきをエッセイとして収録する。

序章	イスラームから考える「つながりづくり」と「信頼」 今後の世界を見通す鍵として（黒木英充）
第1章	瀬戸内から世界に広がるつながり ある日本人ムスリムの足跡をたどる（岡井宏文）
essay 1	他者を理解するために必要なこと 幕末の「日本人」のイスラーム経験から（黒田賢治）
第2章	多様なひとびとをつなぐ翻訳 イスラームの各地への展開と知の伝達（野田仁）
第3章	異なることばをつなぐ言語 インド洋世界におけるウルドゥー語の役割（須永恵美子）
第4章	未来をひらくイスラーム経済のつなぐ力 その思想と歴史から学ぶ（長岡慎介）
第5章	イスラームで国をつくる 宗教・国家・共同体（近藤信彰）
essay 2	宗教がひしめきあう都市で人がつながる 18世紀イスタンブルの公衆浴場から（守田まどか）
第6章	不信から生まれる信頼？ モロッコ、ベルベル人の「寛容」を中心に（池田昭光）
essay 3	信頼と不信が垣間見えるとき シリアで見聞きしたこと（黒木英充）
第7章	信頼のためのイスラーム思想と戦略 現代南アジアにおける政治運動の正当化（山根聡）
essay 4	中東で政治的な信頼をはかる イラクでの世論調査から考える（山尾大）
第8章	神の教えの実践とヴェール 信頼から信仰を読み解く（後藤絵美）
第9章	「テロリスト」に対する軍事的解決と 信頼のゆくえ フィリピンからの問い（石井正子）
第10章	見えないつながりを描き出す デジタル人文学の可能性（熊倉和歌子）
essay 5	保育園で「つながり」を考えてみた 双方向的探究から広がる新しい世界（太田（塚田）絵里奈）
付録	ブックリストとサイト案内 （荒井悠太）

2022年度イスラーム信頼学全体集会 シンポジウム

「対立と紛争のなかで、つなぐ」

2023年3月2日、2022年度イスラーム信頼学全体集会を東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催しました（対面・オンライン併用）。全体集会は、次年度に開催予定の国際会議に向けての主題・議論の提起をおこなう場として位置づけられています。今回は、移民・難民問題を扱うA03班と紛争影響地域を研究対象とするB03班の共催で「対立と紛争のなかで、つなぐ」というテーマでシンポジウムがおこなわれました。ここでは、シンポジウムの趣旨文と各報告の要旨を掲載いたします。

全体集会趣旨文（石井正子 立教大学）

2022年度の全体集会のテーマは「対立と紛争のなかで、つなぐ」です。他者の排斥や民族・宗派紛争、さらには戦争・・・こうした局面では「信頼」は破壊され、その構築は困難だと思われがちです。しかし、そのさなかにあっても、対立する両者の間にスペースを作り出し、つないで交渉する媒介者は存在します。潜在的あるいは構造的な暴力や剥き出しの暴力には何らかの形で政治的権力が介在するので、つなぐ行為は水平・垂直いずれの方向にもはたらかざるをえません。全体集会では、現代のパレスチナ、ドイツ、新疆ウイグル、100年前の欧米・シリアを舞台に、対立や紛争の現場で人びとはどのようなコネクティビティをもって関係と信頼を構築しようとするのか、4名の登壇者にご報告いただきます。

コメンテーターには、文化人類学者の辻 信一さん（明治学院大学）をお招きします。環境運動家でもある辻さんは、「スローライフ」や「しあわせの経済」などのテーマで数多くの著作を発表し、多彩な活動を行っていらっしゃいますが、

2021年、高橋源一郎氏と共著で『「あいだ」の思想：セパレーションからリレーションへ』（大月書店）を出版されました。この本には、コネクティビティを考えるうえで示唆に富んだ思索が展開されています。「あいだ」の思想から、「つなぐ」について考えるヒントがいただけるのではないかと、楽しみです。

報告要旨

紛争下での信頼と猜疑： パレスチナ人と「他者」が織り成す関係性 （鈴木啓之 東京大学）

この報告では、第一次中東戦争（1948年）によって故郷を失い、その後も多くの紛争を経験してきたパレスチナ人が他者と織り成す信頼と猜疑について論じる。難民や無国籍者、戦時下の市民として突然に他者と関係を取り結ばざるを得ない瞬間を、パレスチナ人はどのように過ごしてきたのだろうか。2000年代に入ってから刊行されたパレスチナ人による回顧録を主な資料として、この報告では紛争下での信頼と猜疑の交差を分析する。特に、紛争では対立する関係にあったユダヤ人やイギリス人などの他者に加えて、本来は同胞であるはずのパレスチナ人や各国のアラブ人への言及に着目することで、紛争下で示される信頼と猜疑の重層性を検討していきたい。

ドイツのムスリムとユダヤ人の 関係性からみる移民問題の現状 （昔農英明 明治大学）

ドイツにおけるムスリムの統合を考える際には、先住の白人ドイツ人とトルコ系移民を中心と

会場の様子



するムスリムとの関係性が注目されがちである。ただそれに加えて、ドイツに在住するエスニック・マイノリティ集団間との関係性に注目することも重要である。本報告では、ドイツにおいて歴史的に重要なマイノリティ集団であるドイツ在住ユダヤ人とムスリム、とりわけトルコ系ムスリムとの関係性からムスリムのドイツ社会への統合を分析する。両者の関係性は、ドイツにおける「反ユダヤ主義」や「イスラモフォビア」に端的に示されるように、しばしば差別を被るマイノリティ集団という共通性を有しつつも、ムスリムの問題と指摘される反ユダヤ主義や中東におけるイスラエル・パレスチナ関係が双方の信頼関係を構築するための大きな障害とみなされてきた。本報告では、ドイツのムスリムとユダヤ人との関係性からコネクティビティの課題を考えていく。

新疆ウイグル自治区における信頼

あるいは団結の問題：民族幹部の形成と変容
(熊倉潤 法政大学)

中国の西北部に位置する新疆ウイグル自治区——中国共産党は1949年にこの地の統治を始めて以来、党と現地をつなぐ存在である民族幹部の育成に取り組んできた。それはまた党が信頼できないとみなした人間を容赦なく処分し、選別された人間を党の周りに団結させる過程でもあった。1949年以来、2021年に至る長期的のスパンを通じて、新疆ウイグル自治区の民族幹部は、どのように起用、あるいは淘汰され、どのような変遷を遂げたのだろうか。民族幹部という補助線をひいて、新疆ウイグル自治区における党と現地の「信頼」、あるいは中国共産党の言い方での「団結」の問題について考えていきたい。

第一次世界大戦期の レバノン・シリア移民と中東地域の再編

(黒木英充 東京外国語大学AA研・北海道大学SRC (併任))

19世紀後半以降、レバノン・シリア地域出身の移民は、南北アメリカを中心に西アフリカやオーストラリア、フィリピンにまで拡散した。またエジプトや西欧に定着する移民もいた。第一次世界大戦が始まると、オスマン国籍で英・仏・米



ディスカッサントの辻信一氏(中央)、登壇者の鈴木啓之氏(右、B03班研究分担者)、総合司会の石井正子(左、B03班代表)

やその植民地等に居住する移民たちは形式上「敵国民」となった。しかし、マンチェスターにて繊維貿易を世界展開していた Fadlo Hourani (著名なアラブ史研究者 Albert Hourani の父) らマンチェスター・シリア人協会の人々は、英国政府・アラブ反乱軍・世界各地のレバノン・シリア移民をつなぎ、地域の独立のために活動した。戦時の「遠隔地ナショナリズム」に、移民のつなぐ力を見出したい。

ハシャン・アンマール

立命館大学立命館アジア・
日本研究機構

伝統的な「互助の信頼」と 金融デジタル化の最新テクノロジー

水と油か、新しい融合か

今やポスト資本主義の世界経済は、デジタル技術の躍進により、
仮想通貨やフィンテックの新手法に満ちている。イスラーム的な「互助の信頼」に
裏打ちされた福祉制度も最新の技術をどんどん活用する現在、その行く末は？

最近、世界的にインフレが進み、日本でも円高その他の理由で物価高が激しくなり、不安と不信が続いています。これに対して、仮想通貨の提唱者は、仮想通貨を用いた分散型通貨であれば、これまでの国家が管理してきた中央集権型通貨よりも、インフレに強いと訴えてきました。しかし、イスラームの観点から見ると、インフレでなければよい、というわけではありません。

2010年にビットコイン両替が始まって仮想通貨が目を引きようになり、今では、仮想通貨はイスラーム圏でも広く流通しています。しかし、現実の経済の中で使われるからと言って、イスラーム法の観点から許容されるわけではありません。

「ビットコイン（やその他の仮想通貨）は、イスラームから見てハラール（適法）なのか」という問いは、一般市民からもイスラーム法学者の間からも出されてきました。仮想通貨がイスラーム的に合法かどうか、という問題は、仮想通貨が本当に「通貨」なのかという問題とも関係しています。ビットコインは、最初の頃、価格が急騰して人気が高まりました。しかし、そのように値が上がる商品は、イスラーム経済で嫌われる「ガラル（不確実性）」や「マイシル（賭博性、射倖性）」につながるという批判がすぐに出てきました。2010年代半ば頃のイスラーム法学者の論争を見てみると、通貨の1つの特性を国家による発行や管理に還元し（つまり、中央集権型の

通貨を是として）、仮想通貨を批判する考え方が強かったことがわかります。イスラーム経済がもっとも嫌う「リバー（利子）」の要素も入っているという批判もありました。

イスラーム世界の通貨は、ご存じの方も多いと思いますが、最初は、ディナール金貨とディルハム銀貨がベースとなっていました。イスラームが7世紀にアラビア半島の商業都市マッカで始まったことは周知の通りです。マッカは、カアバ聖殿があって宗教的中心でもありましたが、マッカの住民のほとんどは商人で、商業の中心地でもありました。ところが、当時のアラビア半島には大きな国家はありませんでした。そのため、商人たちはビザンツ帝国の金貨やサーサーン朝ペルシャの銀貨、あるいは、金をビザンツ金貨の重さに切って使っていました。後に、イスラーム帝国が成立すると、両帝国の金貨と銀貨の仕組みを取り入れて、世界貿易ネットワークを構築しました。

これがイスラーム初期のモデルとなって、現在でも、法学者の中には、金貨・銀貨こそ正しい通貨のあり方であると論じる人がいたり、「イスラミック・ディナール」を復活させようという運動が起きたりします。しかし、金や銀という具体的な貴金属の存在を前提とすると、今のように拡大し続ける経済を支える通貨としては限界が生じますので、紙幣を認める見解のほうが多数派です（アラブ諸国では、紙幣がディナールやディルハムという名で発行されています）。

さて、仮想通貨とは、交換手段として使用することができるデジタル資産の一種であり、ビットコインがよく知られていますが、今では何十もの仮想通貨が出されています。仮想通貨が従来の通貨と異なる最大の点は、国家の権威に支えられていないことにあります。その意味で中央集権的ではなく、分散型ということになります。国家の裏打ちを「通貨」の条件とする人は、仮想通貨はデジタル資産ではあるけれども、通貨ではない、と主張します。

すでに、2018年には湾岸諸国でビットコインが暴落して、社会的にも大きな問題となりました。ロングリングに使われるという懸念も強く表明されています。また、フェイスブック（現メタ）が2019年に始めようとした仮想通貨リブラ



ヌズム（イスラーム的の制度）の代表研究例

رحلة ابن بطوطة إلى أكاديمية السلطنة المغربية (779)	رسوم دار الخلافة (448)	المراج الأبي يوسف (182)
تاريخ الدول الإسلامية (789)	تتمتع الأمان في تاريخ الوزراء (448)	فتح القام (207)
تاريخ الدول الإسلامية (795)	الامكان السلطانية المغربية (450)	كتاب الرد القرشي (207)
تاريخ ابن خلدون (808)	الامكان السلطانية لأبي يحيى الفراء (458)	سيرة عمر بن عبد العزيز (214)
رحلة ابن بطوطة (808)	تاريخ بغدادت بشر (463)	الأوقاف - أبو حنيفة (224)
زيرة الأمان في تاريخ الإسلام (809)	السلطان والمسلم المغربي (487)	الفتاوى الكبرى في الفقه (230)
الروايات الإسلامية في تاريخ الخطوط والأثر (845)	الفتاوى الكبرى في الفقه (497)	تاريخ ابن معين - روية ابن حجر (233)
تاريخ مكة المكرمة والمسجد الحرام والحرمين الشريفين (854)	التاريخ المغربي في تسمية الشوك (505)	تاريخ خليفة بن خلدون (240)
نظم المدن في تاريخ أهل الزمان (855)	لكلغة تاريخ القرشي (521)	الخلق في أخبار قرشي (245)
التجويد الزاهرة في شرح مسر والقاهرة (874)	تاريخ دمشق لابن القاسم (555)	أخبار الدولة العباسية (245)
سيرة جزيرة الأمان (900)	الإخبار (584)	التسمية والتجزئة في وصف ما يختلف في الأقاليم الفقهية والجماعات القبلية (255)
الإخبار بالتاريخ لمن أهل القرون ث القرشي (902)	تاريخ بيت المقدس (597)	التاريخ الكبير للقرشي - ت القاسم والشمال (256)
حسن الحضارة في تاريخ مسر والقاهرة (911)	المنتخب في تاريخ الشوك والألم (597)	فتح مسر والغرب (257)
نظم الأمان في نظم القرون (920)	فصلان بيت المقدس - ابن الجوزي - في الأوقاف (597)	المعرفة والتاريخ - ت العمري - في العراق (277)
تاريخ جزيرة العرب في تيسر الشوك (925)	رحلة ابن حجر في تاريخ الجليل (614)	فتح القام (279)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	الفتوح في أخبار الزمان (623)	التمسك والتمسك لابن خلدون (280)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	معجم القام (626)	تاريخ ابن زركة الشافعي (281)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	الفتوح في التاريخ (630)	الفتوح في التاريخ (292)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	الفتوح السلطانية والتمسك القومية - سورة صلاح الدين الأمان (632)	تاريخ الخطوط - تاريخ الزمان وشماله وسعة تاريخ القرشي (310)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	زيرة القام في أخبار ابن حجر (660)	سيرة جزيرة العرب (334)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	الروايات في أخبار الوثائق التورية والشمالية (665)	المراج وسعة القام (337)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	زيرة القام في أخبار ابن حجر (717)	أخبار الزمان (346)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	الفتوح في أخبار ابن حجر (748)	التمسك والتمسك للاسقاطي أو مسالك الملكة - لابن (346)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	تاريخ الإسلام - ت بشر (748)	نظام القام (4)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	تاريخ ابن خلدون (749)	فصل مسر السيرة (355)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	الفتوح القومية في شمالة القرية - في القام (751)	أمن القام في معرفة الأمان (380)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	الفتوح القومية في شمالة القرية (774)	التمسك والتمسك للمبني - العزيمي (380)
تاريخ القام في أخبار ابن حجر (1089)	رحلة ابن بطوطة إلى أكاديمية السلطنة المغربية (779)	فصل مسر وأخبارها وخبراتها (387)

私の研究の分析で使っている古典的なアラビア語文献例



イスラーム福祉制度のワクフ（寄進財産）にブロックチェーン技術を導入 (https://mywaqf.com/より)

が、各国政府の不安を呼び、国際的に連携して仮想通貨を規制しようとする動きも出てきました。このような動きに対して、ドルと連動するテザーのような仮想通貨も登場しています。さらに、仮想通貨への国際的な批判の1つには、仮想通貨をつくり出すコンピュータを駆動するために膨大な電力を消費するという、環境保護の観点からなされるものもあります。イスラーム世界でも、これらの議論は、イスラーム法と連動した経済活動の公正さの点から取り入れられています。

その一方で、最近では、仮想通貨のベースとなっているテクノロジー、つまりブロックチェーンについては純粋な技術としてそれほど批判の対象にはならず、東南アジアのイスラーム国でもどんどん導入される傾向にあります。

ブロックチェーン技術は、ピアツーピア (P2P) システムに依存しています。ピアツーピアとは、末端にあるパソコン同士がネットワークを通じて交信する仕組みを指します。中央にサーバーがある状態ではなく、端末と端末がつながるわけです。わかりやすい例としては、インターネット電話を想像してください。電話と言っても、どこかにサーバーを持つ電話会社が仲介する必要はありません。

これを経済活動に適用すると、たとえば、これまでは銀行などを通じて送金しなければいけなかったのに、誰でも直接的かつ即時に支払いまたは受取りができます。この技術は仮想通貨に用いられていますが、イスラーム金融では、タバールアート取引（寄付性のある取引）の分野などでの送金などにおいて活用が広がっています。私が専門としているワクフ（寄進財産）の分野でも、社会的な公益のために寄付する時にこの仕組みを使うと、いちいち銀行を利用する必要がありませんので、イスラーム的な社会運用にとって有益という考え方が浸透してきました。

仮想通貨が普及し始めた頃のイスラーム経済論での仮想通貨論が、もっぱら「通貨」という問題に関わる法学的議論をしていたのと比べると、最近の議論は、ブロックチェーンという仮想通貨のベースとなる技術の有益性が主として論じられているように思います。私の議論の1つは、イスラーム社会の構造として「互助の信頼性」が成立する仕組みが多層的・重層的に作られており、特に効用が非常に広いワクフ制度の場合にそれが顕著だということですが、ブロックチェーン技術を公益のための寄付に活用するという現象は、金融デジタル化時代に「互助の信頼」を見知らぬ人たちの間で構築する方法として利用されているものだと考えられます。

ブロックチェーン技術は、より効率的で透明性の高いワクフのシステムを構築する可能性を持っています。特にワクフ財のデータや管理に関して、ブロックチェーンを利用した公開台帳に記録するならば、現代にふさわしいワクフ制度が姿を現すことも期待されます。

その先端的な事例として、マレーシアとインドネシアの事例を探究しています。私の研究は、古典的なアラビア語の法史資料から解析される「ヌズム（イスラーム的制度）」と、その現代的適用の事例を結び合わせる方法論に拠っていますが、伝統的なワクフ制度の「互助の信頼」の仕組みと現代的で先端的なフィンテックの結合は、実に刺激的な研究材料を提供してくれています。

ニッ山達朗
香川大学

SNSがもたらすイスラームの 新たな水平的コネクティビティ

世界中のムスリムがスマートフォンを所有し、アプリケーションやSNSを使いこなす時代がやってきた。これらの変化は、ムスリム同士のつながりやイスラームの実践にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

みなさんはどのようなSNSをどのように使っているだろうか。SNSを通じて知人の近況を知るといのは一世代前の話らしい。いくつかのSNSで複数のアカウントを使い分け、お店探しから、推し活、就活、恋活においてさえSNSが使われることがあるらしい。Zでない世代の筆者にとっては、何がどうなっているのやら…と学生につぶやいたら、「SNSをやらないのは存在しないのと一緒にですよ」とリプライされてしまった。コミュニケーションの手段を越えた、存在論的なツールになってきたのかとさえ思えてくる。

この状況は、世界中のムスリムにとっても同じようである。あらゆる情報がSNSを通じてやりとりされるが、イスラームの教えや実践に関することなど、ムスリム特有の情報もそこで共有されるようになってきた。例えばヒジャブの被り方から、イスラーム的に正しい恋愛まで、ムスリムとしてのあるべき行いを情報発信するインフルエンサーもよく見かける。誰もが自由に投稿することができ、世界中のムスリムがリアルタイムでその投稿を閲覧・共有できるようになったことは、イスラームに関する人のつながりにも大きな変化をもたらしているであろう。イスラーム信頼学プロジェクトのキーワードの一つに「水平的なコネクティビティ」があり、ムスリムは地域を超えた水平方向のつながりに長けてきたとされている。SNSがこの水平的なつながりに変化をもたらす新たなツールとなるならば、イスラームのコネクティビティの議論において欠かすことのできない重要なテーマになると考えている。

研究の最前線ということであれば、ムスリムのSNS上のつながりについて焦点をあてた研究は、この数年である程度なされている。ただし、まだそれほど議論が深化しておらず、また私が興味深いと思っているテーマに、聖典クルアーンについての投稿がある。それが興味深いと思う理由の一つは、クルアーンとSNSの特徴の相違にある。クルアーンは神から下された啓示をまとめたものとして、約1400年前から変わっていない特徴があり、そのテキストを変えるのは罪とされる。一方で、SNSの特徴の一つは、つねに新しい情報が更新されることにあるのではないだろうか。変わることはないテキス

トが常に投稿され続けるという使われ方は、考えてみれば妙である。

ただし、不変的なテキストの投稿といっても、全ての投稿が同じというわけではない。114章のなかのどの章や節をもちいるか、誰のどのような朗読で、字体や画像や動画はどのようなものを付すか、などの多様なバリエーションがある。それゆえ、同じ章節のハッシュタグで存在する数十万の投稿においても、同じデザインのは珍しい。テキストは変えてはいけませんが、それ以外の要素を変えることで、投稿が続くのかかもしれない。

では、テキスト以外は自由に変えられるかということ、そうでもない。イスラームは偶像崇拝を禁ずるために、特定のイメージが崇拝の対象になったり、聖なるものとみなされたりすることを避けている。それゆえ、クルアーンに付される画像は文字のみのもも多く、画像投稿に特化したInstagramでさえ、文字による投稿が多い。文字以外には唐草文様や花・樹などの自然、モスクなどが選ばれることもある。厳密な決まりはないものの、それぞれの投稿者が相応しいと思う画像や音声を選び、変化をつけて投稿してゆく。SNS上のクルアーンは、不変的な点と可変的な点の狭間で、微妙なバランスをとりながら、投稿が繰り返されているといえる。ただし、この塩梅は各ムスリムによって異なるので、その線引きをめぐって、ムスリム同士で議論や対立がおきることはないのだろうか。そこが、私が着目している一つのポイントである。

簡単に投稿・共有できることゆえの問題は、それだけではない。誰でも自由に投稿できることによって、変えてはいけぬテキストを間違えて変えてしまうリスクもある。さらには、いつでも閲覧できるゆえの問題もある。例えば、書物の形状にまとめられたクルアーン(ムスハフという)の場合、神聖であるがゆえにトイレなどの不浄な場所に持ち込むことや、トイレから出た後に手を清めずに触ること、何かをムスハフの上に置くことなどが、不敬な扱いにあたりとされている。スマートフォンの中でクルアーンを開いている場合は、トイレに行くこと、不浄な手で触ることなどは問題にならないのだろうか。またムスハフの場合には、古くなったもので

2019年2月22日チュニジアの調査地の床屋において筆者撮影：写真右にいくつかのクルアーンの章句が見える。他、写真左上のテレビからはクルアーンのコースプ章が流れている。



あっても破棄することは避けられていたが、何年かに一回買い替えるスマートフォンの中のクルアーンの場合は、どうしたらいいのだろうか。

このように、スマートフォンやSNS上のクルアーンは、幾つかの新たな問題を生じさせているが、もちろんメリットも多い。ひと昔前はラジオやテレビ、カセットテープなどで聞いていたが、いつでも検索一つで好きな章句を好きな朗誦家の声で聞くことができるようになった。新型コロナウイルス感染症により、人々が対面で会うことが許されない状況下では、SNSはクルアーンの学習にも大きく寄与しているという報告もある。世界中のムスリムのあいだに急速に浸透し、数千万・数億というクルアーンの投稿がなされているのは、このような利便性ゆえのことであろう。

では近い将来、クルアーンを学ぶ手段は、SNSやアプリ

ケーションが主流になるのだろうか。そうとも言えないのは、スマートフォン上で流れる音声としてのクルアーンよりも、書物の形状のムスハフが重要であるというムスリムの声を聞くからだ。実はこのような意見は不思議なことでもある。というのも、クルアーンという言葉は声に出して誦まれるものという意味があり、朗誦したり聞いたりする音による実践が重視されているからである。このことを鑑みれば、スマートフォン上のクルアーン的重要性も高そうである。それでも、書物の形状のムスハフこそが重要であるという説明がなされるのは、SNSでは得られないクルアーンとムスリムとの関係が存在し、それが重要な役割を果たしているからかもしれない。SNS上のクルアーンについて考察することは、リアル世界のイスラームのコネクティビティの重要性についても考えるよいヒントになりそうである。

長 有紀枝

立教大学/認定NPO法人
難民を助ける会

ウクライナ難民支援

研究と実務の交わる場所

「研究の最前線」と題したこのコーナーに「ウクライナと難民支援」の原稿依頼を受け、正直、戸惑いを覚えた。私はNGOの立場から紛争地での緊急人道支援や難民支援、地雷対策に長く携わっており、現在は本科研「イスラーム信頼学」のA03班「移民・難民とコミュニティ形成」の協力団体で、ウクライナ支援に関わる認定NPO法人難民を助ける会の会長を務めている。それゆえ、当然といえば当然のご依頼であったわけだが、戸惑いには理由がある。

これまで私は難民問題や緊急人道支援、地雷対策、人道支援における民軍関係など、求めや必要に応じて文章を書き、研究会やシンポジウムなどで報告や発表も行ってきたが、これらの領域は研究とは切り離れた「実務」やその延長と認識していた。

では何が「研究」かという、難民を助ける会(AAR Japan)の現場での体験が出发点ではあるのだが、紛争地での深刻な国際人道法の違反や人道課題、博士学位論文で扱ったボスニア・ヘルツェゴビナのスレブレニツァで1995年に発生した集団殺害事件のメカニズムの解明や付随するジェノサイド予防に資する研究である。

AARの活動は、当然のことながら、紛争や災害、構造的な暴力により命が危険にさらされ、人間としての尊厳を奪われるような生活を送っている人々の命を長らえ、その尊厳を取り戻し、未来につなげる「生者」のための活動だ。

他方で、私の研究の主役は「死者」や「遺体」「記憶」、そして虐殺や大規模な人権侵害を引き起こした「加害者」たち。なぜ彼らがそのような意思決定をしたのか、そこにどのような動機や背景やプロセス、メカニズムがあったのか、類似の事例と共通項はあるのか、何が普遍で、何がその事件(地域)固

有の事情なのか。これらを分析・考察するのが、私にとっての研究だ。こうした作業に没頭すると、事件が起きなかった方の選択肢が複数あり、まだ事件を止めることができるような、犠牲者が生き返るような詮無い錯覚に陥ることもある。

これが冒頭の戸惑いの理由なのだが、「実務」の延長としてお受けした本科研の課題に取り組むうちに、研究と実務は分かちがたく連続していることに改めて気づくことになった。

たとえば2022年1月、私が報告者となったワークショップ「ディアスポラによる『遠隔地ナショナリズム』と信頼構築」では、スレブレニツァ事件の当事者の生のローカルな記憶のみならず、旧ユーゴ諸国という地域の、そして移民が暮らすホスト国をも巻き込む国際的な信頼と不信、記憶の政治が、これら難民・移民といったディアスポラの活動から大きな影響を受けていることを思いしらされた。

AARが難民・避難民支援を行う、ウクライナに関しては、ワークショップの準備の過程で収集したボスニアのディアスポラ文学においても期せずして出会うことにもなった。サラエボ出身の作家アレクサンダー・ヘモンは、92年に文化交流プログラムでシカゴ滞在中にボスニア紛争が勃発、帰国できないまま、アメリカで執筆活動を開始する。2002年のデビュー



ウクライナから国境を越えてポーランド南東部コルチョバの難民受付センターに着いた難民(2022年3月12日/提供:AAR Japan)



ウクライナとの国境近く、モルドバ・パランカに設けられたバスセンター(2022年3月17日/提供:AAR Japan)

長編『ノーホエア・マン』（岩本正恵訳、白水社2004年）には、アメリカで暮らすディアスポラのボスニア人男性が父の故郷、ウクライナを旅する一節がある。彼は本書が自伝的小説と読まれることを嫌うと聞かすが、ヘモンの父親もまたウクライナ系。アメリカに暮らす、ボスニアのディアスポラと思った主人公の父親は、ウクライナのディアスポラだった。

先に触れた博士論文では、前段で、ジェノサイド条約を生み出したユダヤ系ポーランド人法学者ラファエル・レムキンの生涯とジェノサイド概念誕生の背景を追った。そこに登場した町が象徴的だ。彼が大学生を送り、まさにこの語誕生の契機の一つともなったトルコのアルメニア人虐殺の首謀者殺害事件の裁判について、教授陣と激論を交わした町。この地は、レムキンの学生時代を含め、1914年から1945年にかけて8回も支配者が変わり、その度、レンベルク、ルヴフ、ルヴォフ、リヴィウと名前を変えた。そう、そこは、現在ウクライナの人道支援活動の最前線、リヴィウである。

AARの活動を通じ、ウクライナの難民支援に触れて思うことは、ウクライナの避難民といっても、とても一くりに、「総体」として語れる対象ではないということだ。そもそも国土は広大、出身地はもちろん、2月24日以前の社会的・経済的状況や属性、人生設計、家族構成、生活状況、将来の夢や希望も、戦争によって受けた傷も一家族一家族、そして一人ひとり異なる。ロマはじめウクライナ系以外の人はなおさらだ。

2022年12月6日現在、2月24日以降、1600万人以上がウクライナから国外に逃れ避難民となった一方で、2月28日以降11月29日までに812万人がウクライナへ帰国している。鉄道など交通手段が整い、近隣諸国が国境を開いているため、避難民の流出規模と速度が記録的だが、帰還の速度と規模も記録的である。

このウクライナの人々が置かれた状況、その結果としての難民避難民問題を考える時、私のもう一つの研究領域である、



キシナウの学生寮に滞在するスザンヌさん（中央）と子どもたち（2022年5月27日／提供：AAR Japan 撮影：川畑嘉文）

「人間の安全保障」概念のレンズを通してみるのは有益だと思う。単に「かわいそう」「日本人に生まれてよかった」で終わらせない気づきを、私達に与えてくれるからだ。

人間の安全保障とは人間一人ひとりに焦点をあて、その安全を最優先にするとともに、人々自らが安全と発展を推進することを重視する考え方だ。ウクライナ戦争は、人間の安全が保障されるには、国家の安全が保障されねばならないという両者の補完関係を示したが、同時に戦時下で、ウクライナの人々は、人間の安全保障を構成する3つの要素—恐怖からの自由、欠乏からの自由、尊厳とともに生きる自由—すべてを奪われていることがわかる。

国連人権高等弁務官事務所（UNOHCHR）によれば、判明しているだけでも一般市民の死傷者数は、11月末現在1万7千人を超え（死亡6702人、負傷10479人）、この中には、1199人の子供も含まれる（死亡424人、負傷775人）。世界保健機構（WHO）によれば、12月1日現在、医療施設や医療車両への攻撃は715件に上った。市街地、商業施設を標的とした爆撃、占領地での人々の拘束や拷問、殺害、ロシアへの強制移送は、人々を恐怖に陥れ、物資の極端な欠乏、インフラとライフラインの破壊は人々の欠乏からの自由を、そして人間としての尊厳を奪い、人々の強制的な移動を生み出している。ウクライナ産の小麦粉に頼ってきた国、あるいは代替小麦の輸入競争に参加できないイエメンなどの貧しい国の人々の飢餓を助長させ、世界の食の安全保障を危険にさらすとともに相互依存が進む世界で、世界をエネルギー危機に陥れている。待ったなしの状態に置かれていた地球環境問題への対策も大きく阻害している。

人間の安全保障には、人間とはだれか、という問いが、いつもついて回るが、ここでいう人間とは「すべての人」のことだ。その中には、過去、現在、未来の人も含んでいる。この点において、私の実務家としての責務、研究者としての対象も合流する。今度は「イスラーム信頼学」を人間の安全保障の視点からも考えてみたい。



コミュニティセンターで子どもたちに話を聞くAARキシナウ事務所の平出唯＝モルドバ中西部ファレスティ県（2022年8月12日／提供：AAR Japan）



地域間の関係を地図化して捉える

佐藤 将

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

GISを用いることで様々な地域間の関係性を垣間見ることができる。今回紹介するのは子育て関係や外国人材であるが、こうした地図を通した見える化がもたらす信頼につながるアプローチを見ていきたい。

私の研究に不可欠な研究ツールがGISである。GISとは地理情報システム (Geographic Information Systems) の略であり、位置情報をもつデータをコンピュータ上で可視化するシステムである。このツールを用いることによって、EXCEL等の統計データを用いただけではわからなかった分布傾向を発見することが可能となる。今回はこのGISツールを用いて地図化したもののうち、「コロプレスマップ」と呼ばれる、数ないしは比率の高低差を視覚的に表す手法によって作成した地図を2つ紹介する。

まず紹介するのは保育園利用世帯を

通して共働きの子育て世帯がどの地域に多いのかを地図化したものだ。今もなお待機児童が発生している要因は保育園の需要と供給のミスマッチがあるのではないか。このような疑問を出発点とし、子育て支援の研究の一環として作成したものである。図1は2010年国勢調査データを用いて東京40km圏を対象に、未就学児全体に占める保育園児数を保育所利用世帯比率として地域別に表した図である。濃度が濃いほど比率が高い地域を表しており、この図から都心部・多摩エリア・千葉市で高いことがわかる。図1の右側は世

田谷区エリアを拡大したものであるが、2010年時点では23区の中でも比率が低いエリアであることが読み取れる。

次に紹介するのが海外から日本に來日した「外国人材」流動に関する事例である。出入国管理統計では在留資格別かつ国・地域別の出入国者数の把握が可能である。これを踏まえて、今回は在留資格「技能実習2号口」の入国者動向を可視化したものを紹介する。「技能実習」は外国人が技能実習制度を利用し「技能実習生」として日本に滞在するための在留資格であるが、今回紹介する2号口は、中小企業団体や商工会等の団体を受け入れ先として働く人向けに与えられた在留資格である。空間的特徴として読み取れるのは、2018年以降のパーレーを除くと、アジアからの入国者のみで構成されている点である(図2)。過去10年を通して、中国は一貫して高い水準にあるが、2015年頃よりベトナムが著しく増加し、2019年には中国を抜くまでになっていた。他方で、インドネシア、フィリピンにおいても2015年以降急激に増加傾向にある。ただしコロナの影響で2020年は入国者数が大きく減少傾向にあった。他の在留資格について、以下のHPで紹介しているので参照されたい。

<https://lo-index.aa-ken.jp/>

以上、GISを用いた地図化事例を紹介してきた。こうしてビジュアル化すると地域間の関係を見るのが容易になる。これはイスラーム信頼学が目指す、コネクティビティの可視化にも応用可能である。これを踏まえて、地図化という観点から信頼のビジュアル化への寄与を目指していきたい。

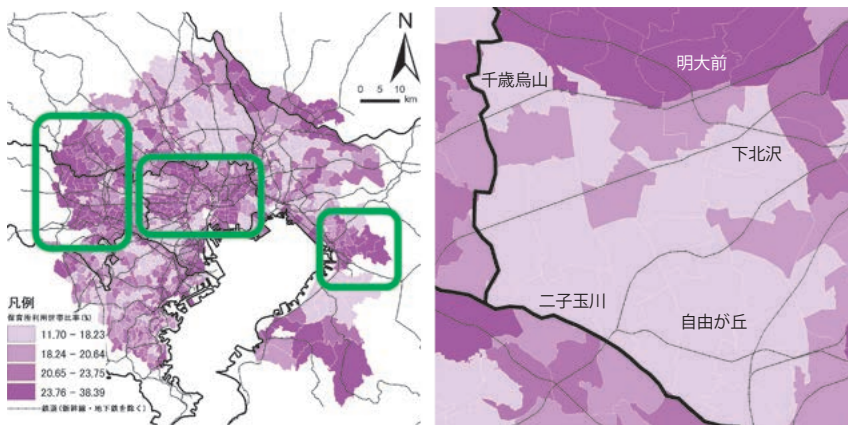


図1：首都圏における保育所利用世帯比率の地域別分布状況を表した図。右側は世田谷区部分の拡大図。

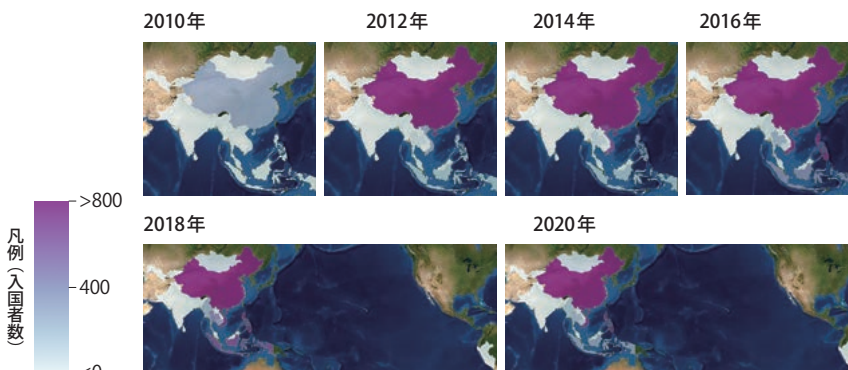


図2：「技能実習2号口」の入国者数の動向の時系列変化を表した図。



インド洋の港市・異文化間交易・信頼

嘉藤慎作

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

民族・宗教・思想などが互いに異なる多様な人々が往来した近世インド洋の港市スーラト。都市は交易により活気に溢れた一方、様々な背景を持つ住民の間で少なからず諍いも生じた。多文化共生ゆえに生じる摩擦に対して、人々はそれぞれどのように折り合いをつけ、信頼を育んだのだろうか。

筆者は近世におけるインド洋の港市に関心を持ち、現在はインド亜大陸西北岸に位置する港市スーラトを対象として研究をおこなっている。スーラトは、1573年にムガル朝が同港市を含むグジャラート地方を併合した後、主な輸出商品である綿布や藍を産出し、同時に輸入商品の消費市場としても機能したデリー・アーグラを中心とする北インドと密接に結びつき、国際交易港として成長を遂げた。ムガル皇帝の名で運航されたメッカへの巡礼者を運ぶ船も発着したスーラトはムガル朝の海の玄関口であり、そこには同朝の領域内外から様々な人々が行き交った。具体的には、在地のバニヤと呼ばれるヒンドゥー教徒の商人、ムスリム商人のほか、アラビア半島やペルシア湾岸方面からやってきた外来のムスリム商人、アルメニア人商人、ユダヤ人商人、そして、イギリス人、オランダ人、フランス人、ポルトガル人などのヨーロッパから到来した商人がスーラトでの交易に従事した。この時代のスーラトは多種多様な人々が共生するコスモポリスであった。

このようなコスモポリタンな性質は、インド洋の港市にある程度共通する特徴である。そもそも港市は海を隔ててある地域と別の地域が結びつくところであり、また、内陸部と海域との間をつなぐ結節点でもある。まさに港市は異文化接触の場であった。港市ではなじみのない相手と交流する機会が日常的に存在した。顔見知りになったとしても、

基本的には互いに文化・宗教・思想などをほとんど共有しない「異人」のままであり続けた。それゆえ異文化間での摩擦もしばしば生じ、それが高じて紛争が発生することもままあった。ある意味、港市は不信にあふれる場所であった。

しかしながら、不信を抱いてばかりでは交易活動を円滑におこなうことは難しい。異文化間交易の場においては、裏切りへの不安を抱きつつも時に相手を信頼することが求められる。その点ではコスモポリタンなインド洋の港市は異文化間での信頼に満ちた空間であったとも言えよう。だとすれば、異なる文化に属し、宗教・思想・信条・慣行などを違えた人々は、港市社会の中でいかにして相互に信頼を育み、交易を発展させてきたのだろうか。時にはどちらか一方あるいは双方が歩み寄り、相手の慣行に合わせることもあっただろう。衝突を繰り返す中で互いに譲るこ

対岸から描写された17世紀後半スーラトの様子。右手に見える尖塔を有する建造物はスーラト城砦。手前の岸には商人や商品の積み下ろしに従事する労役夫、帽子を被ったヨーロッパ人、彼らに仕える現地の人々など様々な人物が描かれている。

(出典：Philip Baldæus, *A True and Exact Description of the Most Celebrated East-India Coasts of Malabar and Coromandel, as also of the Isle of Ceylon*, London: Awnsham and John Churchill, 1703.)



とのできない部分や妥協可能な部分を探りだし、うまく折り合いをつけることができるような新しい規範・慣習を形成する場合もあつたに違いない。当事者間でうまく折り合いをつけることができないときには、仲裁をおこなう第三者の存在が信頼構築のカギとなつただろう。この場合、様々な文化・宗教に属する人々が共存していたことで紛争が生じたにも関わらず、その紛争を解決する鍵もまた多文化共生にあつたということになる。筆者は多文化共生的な港市社会における「信頼」をキーワードとして分析することで、近世インド洋交易の発展について新たな知見を付け加えることができるのではないかと考えている。そして、そこで見いだされた知見は、グローバル化が進んだ現代社会における文化的相違を背景とした分断を乗り越える上でもきつと役に立つはずである。

イスラーム経済のモビリティと普遍性



研究代表者

長岡慎介

京都大学

研究分担者

五十嵐大介 早稲田大学

岩崎葉子 アジア経済研究所

亀谷 学 弘前大学

小茄子川歩 京都大学

平野美佐 京都大学

町北朋洋 京都大学

安田 慎 高崎経済大学

研究員

荒井悠太 京都大学

2022年度の活動

A01班では、「イスラーム経済」と呼ばれるイスラームの理念にもとづく経済活動の歴史的実践および現代に再登場したその実践に着目し、そこで見られる特有の経済制度（貨幣・金融、市場、所有制度）の独自性と普遍性を解明することをめざす研究を行っています。

この班の大きな特徴は、イスラームおよび中東地域を主たる研究対象としている研究者だけでなく、他地域・他時代（アフリカ、東南アジア、南アジア）や様々な学問領域（歴史学、経済学、人類学、考古学）の研究者が本班の共同研究に参画していることです。そのため、他地域・他時代の様々な経済制度との比較の観点からイスラーム経済の特徴をあぶり出すことで、その独自性と普遍性を明らかにすることをめざしています。

この班の比較研究の基底にあるコア・コンセプトは、この班のタイトルにもなっている「モビリティ」です。今年度も、このイスラーム経済の「モビリティ」の実像に迫るべく、多様な観点やアイデアを班のメンバーが出し合い、検討を行



ジャカルタ中心部の歩行者専用道路に設置された喜捨（ザカート）徴収コーナー。喜捨のオンライン化も進んでいる。（2022年9月、インドネシア、ジャカルタ、長岡慎介撮影）

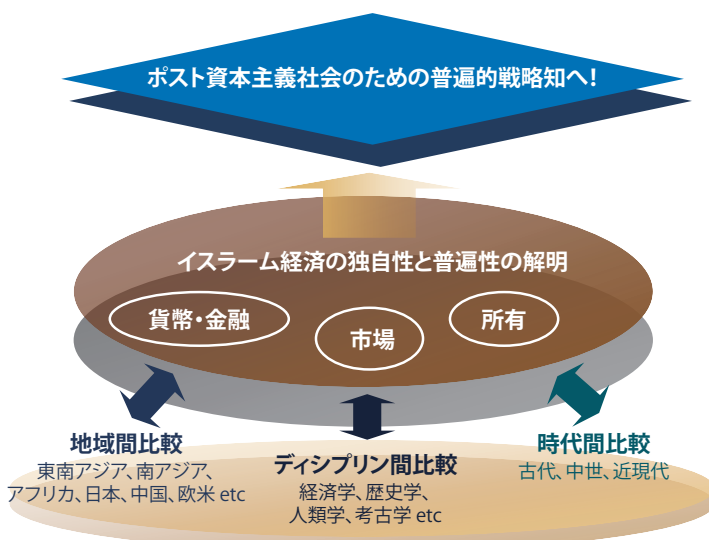
ました。以下は、今年度の研究までに臆気ながら解明されてきたことを記したものです。

*

イスラーム経済の歴史的実践や現代に再興された実践は、イスラームの理念にもとづくことを掲げながら、単にそうした理念から単線的に経済制度が演繹されてきたわけではありません。歴史的イスラーム経済実践については、東西に広がるイスラーム世界各地の慣習や近接する文明圏（アジア、アフリカ、ヨーロッパ）の経済実践との相互交流の中で、他地域の制度を移植したりイスラーム的に再編成したりすることで形成されてきた歴史を辿ることができます。例えば、前近代のイスラーム世界の商取引で用いられていたムダーラバというしくみは、古代メソポタミアや地中海地域で使われていたものがイスラーム的に再編成されたものだと考えられています。

また、現代のイスラーム経済実践については、アジア・アフリカ地域に根付く様々な慣習的制度や世界各地のアンチ／ポスト資本主義的運動、時には近代資本主義そのものを巧みに吸収・再構築しながら、近代資本主義のオルタナティブたる経済システムを構想してきた軌跡を辿ることができます。例えば、1960年代にエジプトで設立された実験的イスラーム銀行は、前近代のムダーラバを用いながらも、運営のモデルはドイツで展開されていた先駆的な農村マイクロファイナンスを参考にしていたと言われています。

他方、こうした多源的な起源から作り出されてきたイスラーム経済の制度は、そうした出自をもつがゆえに、ある種の普遍性を持って他地域や他文明圏に伝播していく力を持つ



クアラルンプール中心部でストリート・ライブをしながら喜捨を呼びかける人々（2022年11月、マレーシア、クアラルンプール、長岡慎介撮影）



ているのではないかとということも出てきました。例えば、前近代のムダーラバが、中世日本の南蛮貿易や近代ヨーロッパの会社組織と類似しているという指摘や、サイバー空間上の寄付/喜捨型クラウドファンディングのしくみが、欧米とイスラーム世界の両者から活発化し、かつ、両者が現代の金融資本主義が生み出したグローバルな格差の是正を企図するという点で戦線を共にしているという指摘は、必ずしも意図して制度が近接しているわけではないものの、イスラーム経済の持つ普遍化のチカラが垣間見られる事例として捉えることができるのではないのでしょうか。イスラーム経済の普遍性については、時代も地域も遠く離れたインダス文明の制度とも共通したものを持っているかもしれないという指摘もあり、イスラーム的な経済のあり方は、単に特定の信仰の中だけで生成されるものではない普遍的なものである可能性も示唆されています。

こうしたイスラーム経済の多元性と普遍性は、「イスラーム信頼学」のプロジェクト全体の視角から見れば、イスラーム文明特有の水平的コネクティビティのあらわれとして捉えることもできると思います。そこでは、多様な価値や実践を垣塙のように飲み込み、しかし、イスラームという一貫した体系の下で経済制度が作り出され、さらに、そこで育まれた経済の知恵や制度が人類史的普遍性を持ちうるという柔軟性に富んだイスラーム経済の動態を見て取ることができます。この班が追究してきたイスラーム経済のモビリティの実像とは、そうしたダイナミズムとして捉えることができるといえるでしょう。



世界的メガバンクの1つであるHSBCのイスラーム金融ブランドの10周年を祝うラッピングATM（2022年11月、マレーシア、クアラルンプール、長岡慎介撮影）

*

今後の課題としては、第1に、各時代・各地域で見られるイスラーム経済の実践を支える経済制度（貨幣・金融、市場、所有制度）が、どのような構造の中で機能し得ているのかについての具体的な探究を行うことです。そこでは、経済制度を取り囲む様々なアクターとの関係を見ることで、イスラーム経済における国家や慣習、互助ネットワークの役割などが明らかになっていくものと思われます。第2に、そうした経済制度の存立構造について、他地域・他時代との比較を行うことで、上述のイスラーム経済のモビリティがどのような独自性と普遍性を持ちうるものなのかがさらに明確になっていくものと思われます。これらの課題も含めて、来年度刊行される予定の「シリーズ イスラームからつなぐ」の第2巻（A01班の研究成果を収録予定）の中で展開していきたいと考えています。



研究代表者

野田 仁

東京外国語大学AA研

研究分担者

高野さやか 中央大学

高松洋一 東京外国語大学AA研

坪井祐司 名桜大学

中西竜也 京都大学

濱本真実 大阪公立大学

矢島洋一 奈良女子大学

和田郁子 岡山大学

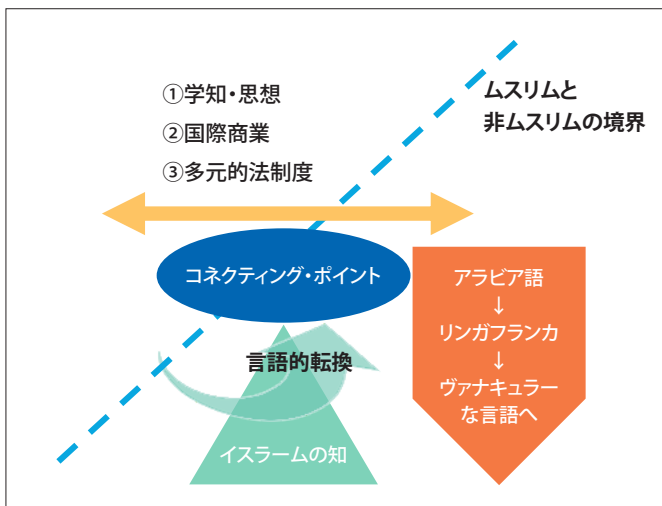
研究員

嘉藤慎作 東京外国語大学AA研

2022年度の活動

2022年度のA02班の活動とその成果について報告します。
本班の大きな課題は、国際会議の開催でした
(詳しくは国際会議の特集をご覧ください)。

本研究班では、翻訳を手掛かりに、人々の信頼構築や関係の結び方を考察しています。ある言語から別の言語への転換に注目し、そこに垣間見える知識の伝達、多元的法制度が可能にする紛争解決、国際商業の3点を切り口にしたいと考えています。この中で商業の役割については、昨年度末のワークショップに触れないわけにはいきません。



2022年3月15日開催のワークショップ「国際商業における信頼構築」(報告①和田郁子「オランダ東インド会社による南アジア・ムスリム船主への役務の提供：船員の事例を中心に」、報告②濱本真実「ロシア帝国東部の国際卸売市場におけるモスクの役割」、コメンテーターとして新井和広氏(C01))では、国際商業上の秩序・関係構築と翻訳の問題を考察しました。和田報告は、ヨーロッパ諸国の各インド会社の商館が

役務をムスリム船主に提供することで両者のつながりが生じ、航海術などの知識の移動も見られたことをあきらかにしました。濱本報告は、イルビートなどのロシア帝国内の商業都市における官製モスクの役割を示しました。新井氏が総括したように、ムスリムと非ムスリムの関係を国際商業の視点から改めて考察する機会となりました。

この内容は、2023年2月19日開催の海域秩序を考察する下記ワークショップの問題関心につながっています。

さて、ロシアにおける調査は本班の研究に不可欠な要素でしたが、依然として展望は見えず、再検討を迫られています。それを受けて、昨年度に引き続き海外研究協力者ジャンペイソワ氏による資料調査(カザフスタン国立中央文書館)を行いました。その成果は、国際会議の報告にも生かされています。

本班が共催を担当した第二回イスラーム信頼学国際会議では、法・秩序の多元性に焦点を当てて報告を準備しました。班内からは、高野報告がインドネシアにおけるシャリーアをも含む司法の多元性を論じ、またジャンペイソワ・野田による共同報告は、ロシア帝国末期において中国清朝との間に成立した国際紛争解決の制度における、現地(新疆・カザフスタン)のムスリムも交えた言語の変換の意義を問いました。海外からはG. ブラク氏(ニューヨーク大学)を招聘し、オスマン帝国のカーヌンの多義性を論じてもらいました。

また、ブラク氏は11月24日に“The Rediscovery of a Phantom Library: Studying the Library of Ahmad Pasha al-Jazzar”と題して知の蓄積・アーカイビングの一例を紹介する講演も東京で行いました(C01班と共催)。海外研究者の講演としては、北大スラブ・ユーラシア研究センターに滞在中であったM.ホダルコフスキー氏による“Empires of the Steppe: Eurasian Empires in Comparative Perspective, 1500-1900”が、多民族帝国における言語と秩序の問題を考える良い機会となりました(5月20日、B01班と共催)。

今年度本班が主催したのは、次のワークショップです。

ワークショップ

「近世の海洋空間をめぐる異文化接触と信頼：海賊への対処を事例として」

報告1：末森晴賀(北海道大学)「17世紀末～18世紀初頭地中海の海賊をめぐるオスマン朝ーヴェネツィア関係」

報告2：嘉藤慎作(AA研)「17世紀後半～18世紀初頭インド洋海域における通航の安全保障をめぐる：ムガル朝・オランダ東インド会社間関係の分析から」

コメンテーター：薩摩真介(立命館大学)

異文化間の境界領域として海洋空間を捉え、その境域の扱いをめぐってどのような規範が形成されていたのか、その過程で各主体の慣習や思想がどのように取り込まれたのかを検討するものでした。具体的には17世紀から18世紀への転換期における地中海（オスマン朝-ヴェネツィア間関係）とインド洋（ムガル朝-オランダ東インド会社）の事例が扱われました。地中海の事例では、16世紀以来、オスマン朝が定めたアフドナーメという明文化された規範が存在しましたが、当該時期にはヨーロッパ的な法観念を取り込むような形での変化も看取されました。一方、インド洋の事例では、17世紀初頭に同

海域に進出したオランダ東インド会社と在地政権のムガル朝との間では明文化された規範は基本的に存在せず、衝突を繰り返しながら状況に応じて両者の力関係を反映する形で解決が図られていました。近世という時代においてヨーロッパ側からムスリム国家を見た時に、地中海を挟んですでに長らく交流してきたオスマン朝と新たにインド洋で接触したムガル朝とは共有される慣行・思想的な基盤には差があり、ムスリム側のコネクティビティというものを論じる際には、当然、地域性や歴史的背景を問う必要があるということが改めて浮き彫りになりました。薩摩氏からは、英国における海上軍事や秩序維持の視点から議論を相対化するコメントをいただきました。

カザフスタンの墓地（2009年、野田仁撮影）



今年度より刊行が開始される「イスラームからつなぐ」シリーズ第1巻では、本班が主題とする翻訳の例を、イスラーム社会の複数性と関連付けて示したほか（野田）、本班と連携する公募研究を担う須永恵美子氏によるウルドゥー語の役割に注目した論考があります。本班の成果をまとめることになるシリーズ第3巻に向けても、作業を始めています。



みんなで天幕を張る（19世紀、米国議会図書館、LC-DIG-ppmsca-09955-00208）



研究代表者

黒木英充

東京外国語大学AA研/
北海道大学スラブ・ユーラシア研
(併任)

研究分担者

池田昭光 明治学院大学

岡井宏文 京都産業大学

長 有紀枝 立教大学

昔農英明 明治大学

中野祥子 山口大学

子島 進 東洋大学

村上忠良 大阪大学

特任助教

太田(塚田) 絵里奈

東京外国語大学AA研

難民との間の関係構築という相互的な問題も検討する必要があります。

2022年8月4日に村上一基さんをお迎えし、フランスという移民大国におけるムスリム移民第2世代が、イスラームの実践を通して自らのアイデンティティを確立しながらコミュニティを形成しようとする過程を詳細に解説していただきました。

2022年世界最大の事件・ウクライナ戦争は、ヨーロッパを中心に新たな難民問題を引き起こす原因にもなりました。A02の野田仁さん、A03の黒木、B01の長縄宣博さん、B03の佐原徹哉さんを中心に、ロシアの侵攻直後の旧年度末(2022年3月25日)に、緊急オンラインシンポジウム「ウクライナ戦争の背景とその波紋」(総括班中心の複数科研共催)を開催しました。まずこの戦争の位置づけの把握を目的とし、そのうえで難民問題のインパクトとその中東地域(特にイスラエル)との連関、グローバルサウスの新たな形での顕在化、物資流通・人の移動など地球規模のコネクティビティが危機に陥る可能性を議論しました。いずれもその後、戦争に関わる問題として各所で浮上した論点です。

またA03の黒木、B03の佐原さんが中心となり、レバノンで2022年9月7日に開催した国際ワークショップ「ウクライナ戦争のグローバル・地域的影響に関する中東・バルカン・日本の視点」(黒木代表の他科研・総括班共催)においては、レバノン、トルコ、ギリシア、セルビアの研究者らと深い議論を行うことができました。十分に避け得たこの戦争はなぜ始まったのか、戦争のために中東の人々にいかなる困難が生じ

2022年度の活動

本研究班の目標は次のとおりです。移民・難民が移住先の地域において受入れ社会との間の関係づくりをいかに主体的に行い、(時には移住元の社会も含めた越境的な)新たな「コミュニティ」はいかに形成されるのか、そこにいかなる戦略知が見出されるかを多角的に検討することです。移民・難民が生まれる背景・原因の解明や、受入れ社会の側による移民・

『教科書のナクバ』日本語字幕完成記念上映会ポスター(2023年2月5・11日)

DOCUMENTARY

Al Jazeera ドキュメンタリー

教科書のナクバ

初の外国語字幕

日本語字幕完成記念上映会+トーク

日本語・アラビア語通訳あり

パレスチナ人の歴史はいかに奪われ
いかに取り戻されるのか

監督のレーン・ミトリー氏と構想・企画のムハンマド・エルアルビード氏を
レバノンからお招きします

東京会場
2023年2月5日(日) 15:00-17:30
東京大学駒場キャンパス
18号館ホール

京都会場
2月11日(土) 15:00-17:30
京都大学吉田南キャンパス
総合人間学部棟 地下1B05教室

إخراج
رين متري

فكرة وبحث
محمد ناصر سليمان العريبي

Islamic Trust Studies
イスラーム信託学

東京会場主催 科研費・学術改革領域研究(A)「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築」
(イスラーム信託学)

京都会場共催 科研費・基礎研究(A)「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる
人文的・領域横断的研究」およびイスラーム信託学

上映後の質疑に応じるムハンマド・エルアルビード氏、レーン・ミトリー氏、通訳の森晋太郎氏(左から順。東京大学駒場キャンパス、2023年2月5日。)



ているのか、また国家間の戦争でしばしば見落とされる非正規軍の役割とその歴史的背景も、東欧・中東双方の文脈で議論されました。報道にもあるように、隣国ポーランドを始めNATO加盟諸国が百万単位のウクライナ難民を積極的に保護し受け入れたのに対し、2021年末にポーランドは、ベラルーシ側国境の寒冷森林地帯を彷徨うシリア・イラク移民・難民を受け入れませんでした。ベラルーシとその後ろ盾のロシアがポーランドに圧力をかける駒として移民・難民を使ったのですが、西側メディアのレポーターがウクライナ難民支援を訴えるために露骨な人種的表現を用いるような背景があったことも確かです。また、ウクライナでは成年男性の出国が禁止されたため、難民の約9割を女性が占めており、従来の難民にない特殊な性格をなしています。

ウクライナ難民の帰還が始まったとはいえ、依然多数の女性・子ども・高齢者の難民が世界に拡散しており、日本もその例外ではありません。A03の長有紀枝さんが2023年1月10日に非公開の「武力紛争が避難者および支援者、研究者のメンタルヘルスに与える影響への理解と対応」勉強会を開催し、難民・被災者のPTSDに対応してきた精神科医と難民支援に当たる実務家との対話の機会を設けました。また2022年9月30日にはレバノンにて実務家としてもシリア難民支援に従事するラーウィヤ・アッタウィールさんをお招きし、「レバノンにおけるシリア難民の最新状況」(英語)をお話いただき、単位面積・人口一人当たり世界最高の難民密度の国の状況について報告をいただきました。

現在のウクライナに当たる地域からは、100年以上前から難民が中東地域で受け入れられてきました。2022年4月29日のワークショップ「近代オスマン帝国の難民定住政策における信頼構築とコネクティビティ」では、成地草太さんが、クリミア戦争により発生したタタル人などムスリム難民をオスマン帝国政府がいかに関与し受け入れ、定住支援したかを解説されました。地方住民による義援金などの支援があった一方で、時間の経過とともに紛争も生じる側面があったことが明らかになりましたが、そこに見られるのは現代に直結する、近代国家としてのオスマン帝国の難民政策であったと言えます。

カタルの国際衛星放送・アルジャズィーラ社は多くの良質なドキュメンタリー番組を制作していますが、パレスチナ難民がイスラエル領内と、ヨルダン川西岸地区、ガザ、レバノンといった離散先でいかに自らの教育、とりわけ歴史教育のために苦闘してきたかを描いたアラビア語作品に、同社の許諾を得て日本語字幕をつける作業を行いました。2023年2月5日、11日にはそれぞれ東京大学、京都大学にてその上映と解説講演、質疑の会をレバノンから企画者と監督を招聘して

**新居浜にみる
多文化共生**
濱中彰さんの思いをつなぐ

月日:12月18日(日)
時間:10:00~12:00
講師:
徳田 剛氏 (大谷大学社会学部)
演題:地方部での外国人受け入れの現状と課題-新居浜市の場合
岡井 宏文氏 (京都産業大学現代社会学部)
演題:世界でつながる、地域でつなげる:
濱中彰さんの足跡から多文化共生を考える
場所:新居浜市総合福祉センター 4階 第3研修室

主催:新居浜市国際交流協会
共催:イスラーム信頼学 Islamic Trust Studies
協賛:一般社団法人 新居浜マズド
申・問: TEL:0897-65-1579 e-mail: niigamashikokusai@gmail.com

文部科学省科学研究費・学術変革領域研究(A)
「イスラーム的コネクティビティにみる
信頼構築:世界の分断をのりこえる戦略知の創造」(イスラーム信頼学)

開催しました(44頁のポスター参照)。この番組自体、相互に行き来して対面接触するのが難しいパレスチナ人同士が越境的につながり合って制作したものです。各地でアイデンティティを否定されようとする困難な状況を共有し、それに抗うことで、新たなコミュニティを形成しようとする試みの一つと言えます。東京・京都の両会議はシビルダイアログ・キャラバンの一環としても実施しました。

2022年12月18日には、やはりシビルダイアログ・キャラバンの一環としてA03メンバーの岡井宏文さんが、新居浜市国際交流協会主催・当科研共催の講演会にて日本の地域に根付いたコネクティビティが世界展開する様相を発表しました(本頁上のポスター参照)。詳細はシリーズ「イスラームからつなぐ」第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』の岡井さん執筆章をご覧ください。

2023年3月2日の全体集会のシンポジウムはA03・B03の共同企画によるもので、その説明は別頁にある通りです。

A03メンバーの海外調査・会議の渡航先は、タイ、イラク、レバノン、ハンガリー、ドイツ、英国、米国にわたりました。ようやく海外での仕事が本格化してきたのを喜ばしく思います。

イスラーム共同体の理念と国家体系



研究代表者

近藤信彰

東京外国語大学AA研

研究分担者

秋葉 淳 東京大学

太田信宏 東京外国語大学AA研

沖祐太郎 九州大学

長縄宣博 北海道大学/東京外国語大学AA研(併任)

馬場多聞 立命館大学

堀井 優 同志社大学

真下裕之 神戸大学

黛 秋津 東京大学

研究員

守田まどか 東京外国語大学AA研

道半ば—2022年度の活動

今年度は、東京大学出版会から刊行予定のシリーズ「イスラームからつなぐ」第5巻『権力とネットワーク』（2024年度刊行予定）をにらみながら、研究活動を継続した。B01班が企画したものとしてワークショップ「近世における権力とコネクティビティ」（2022年7月19日）、「帝国秩序とコネクティビティ」（9月22日）、「信頼を可視化する」（2023年1月7日）、「オスマン・カリフ制をめぐる議論」（1月21日）を開催した。また、他の班や外部の研究グループと共催でM. Khodarkovsky教授研究セミナー（2022年5月20日）、現代クルド・ナショナリズムに関するセミナー（6月19日）、ワークショップ「近世の海洋空間をめぐる異文化接触と信頼～海賊への対応を事例として～」(2023年2月19日)を開催した。

昨年度までは外交や国際関係を中心に扱っていたが、今年度は国際関係にとらわれず垂直方向の権力と水平方向のコネクティビティやコネクティビティの結果であるネットワークの関係に焦点を当てた。9月22日の秋葉報告は、オスマン帝国において、任用試験によるウラマーの職階制度が厳然とあるなか、血縁や地縁による結合が一定の役割を果たす場面もあることを指摘した。信頼学プロジェクト全体のなかでも、ウラマーの結合は一つのテーマとなっているが、官制が発達

したオスマン帝国におけるウラマーの結合のあり方を示した意義は大きい。これに対して、1月7日の太田絵里奈報告は、従来よく議論されてきたマムルーク朝下のウラマーのコネクティビティを、名目的な師弟関係とデジタルヒューマニティーズ的手法により明らかにし、イスラーム信頼学で生まれた新たな研究として評価しうるものであった。

9月22日の真下報告は、やはりリムガル帝国における任官制度であるマンサブ制度を扱い、さまざまな出自の官人をこの制度で登用することで帝国性を担保していたが、個々のマンサブダールの履歴を検討すると、王族や貴族の推薦などコネクティビティによってマンサブが左右される場合も多かったことを指摘した。また、7月19日の守田報告は、通常、共同体のイメージで捉えられるイスタンブルの街区について、異なった宗派間の間にどのような関係が存在したかを論じた。シャリーア法廷など、帝国の秩序が浸透していて、かつ多宗派の住民が生活していたイスタンブルの街区をコネクティビティの観点からどのように説明できるか、帝国秩序とコネクティビティの関係を追求する上でも重要である。

一方、国家体系の研究も進んだ。7月19日の太田信宏報告は、南インドにおけるムガル帝国とヒンドゥー勢力の関係を考察し、単純な臣従や友好関係ではなく、調停可能な上位者として認めるものの、臣従することへのいごちの悪さをヒンドゥー側の史料は示しているとした。イスラーム国家体系を考える際、異教徒の諸勢力との関係がどのようなものであったかは、オスマン帝国とヨーロッパの関係のみならず、さまざまな地域で考えるべき問題であり、重要な事例である。また、1月21日の藤波報告は、オスマン帝国の近代カリフ制は主権国家体制や政教分離にもとづくものであることを指摘し、失った旧領のムスリムについて個別の条約によってカリフとしての監督権を確保しつつも、自国の権利を擁護することが最大の関心事で、カリフ制は必要な場合に利用される程度のもにすぎなかったこと、自らのコミュニティの利益を守るために、ギリシア正教徒の方がカリフ制を強調したことを示した。概念としてカリフ制は存在するが、あくまで国家の主権が前提であり、すでにイスラーム国家体系とは呼べないものになっていることが明らかとなった。

以上のように、国内研究会を通じて、イスラーム国家体系や権力とコネクティビティの関係についての認識が深まり、着実に研究が進展した。特に、狭義の国家体系を越えて、帝国権力とコネクティビティの関係について論じることができたのが、昨年度までにはなかった成果である。国内ではさらに国際関係や国際法の研究者とのワークショップを予定していたが、今年度は果たすことはできなかった。来年度はより



Michael Talbot氏



Tommaso Stefini氏



オスマン皇帝アフメト3世に謁見するオランダ大使コルネリス・カルクーン(ジャン・バプティスト・ファン・モウル作、1727~1730年頃、オランダ国立博物館所蔵)

積極的にさまざまな分野の専門家とより学際的に研究を進めていきたい。

一方、海外との関係では、依然、パンデミックの影響が大きく、海外調査を行うことも可能となったものの、調査者が現地で感染するなど困難がつきまとった。海外の研究者の招聘も2022年10月以降の水際対策の変更により、ようやく、現実的となった。このため、今年度末にはMichael Talbot氏(グリーンウィッチ大学)とTommaso Stefini氏(ヨーロッパ大学研究所)を招聘して、全部で6回のワークショップを開催する予定である。Talbot氏はオンラインで開催された昨年度のイスラーム信頼学国際会議でも報告しているが、オスマン=イギリス関係を中心として業績を上げており、いわゆるカピチュレーションの関係における信頼構築などについて、報告してもらう予定である。特に3月3日に行われるワークショップは、科学研究費基盤A「外交の世界史の再構築：15~19世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制」(代表：松方冬子 東京大学史料編纂所)との共催で、Talbot氏のほか、

オスマン帝国がさまざまなヨーロッパ諸国と結んだアフドナーメを扱っている松井真子氏(愛知学院大学、B01班研究協力者)、サファヴィー帝国とオランダの関係にとり組んでいる大東敬典氏(東京大学史料編纂所)が報告する予定である。一方、Stefini氏はオスマン=ヴェネツィア関係の専門家であり、両者の関係を法的および経済的側面から研究している。科学研究費基盤B「オスマン帝国における社会階層とジェンダーに関する国際共同研究」(代表：秋葉淳 東京大学東洋文化研究所)との共催でワークショップを開催する予定である。彼らの知見をプロジェクトに取り込むとともに日本側との議論を通じて、新たなイスラーム国家体系の理論化につなげていきたい。



研究代表者

山根 聡
大阪大学

研究分担者

青山弘之 東京外国語大学
飯塚正人 東京外国語大学AA研
池田一人 大阪大学
工藤正子 立教大学
後藤絵美 東京外国語大学AA研
菅原由美 大阪大学
中溝和弥 京都大学

研究員

藻谷悠介 大阪大学

2022年度の活動

今年度、B02班は11月の国際会議の開催とともに、研究会やワークショップを開催してきました。年間の活動を通してキーワードとなったのは「戦略」でした。

6月21日、「現代イスラームの思想と戦略：文明間・男女間の分断の克服に向けて」と題するワークショップを開催し、本研究班の飯塚正人さん（東京外国語大学AA研）が「近代西洋との対立論、「文明の衝突」論の克服を目指すイスラーム再考の思想戦略史<序論>」と題して、文明の衝突論が交わされて以降、ムスリム思想家の側から出た対立回避に向けた思想戦略を概観する報告を行ない、後藤絵美さん（東京外国語大学AA研）からは「イスラームにおける男女平等論の展開——「ムサー

ワー」の思想と戦略」と題して、ジェンダー間の問題を現代のムスリムがいかに克服しようとしているかについての報告がありました。コメンテーターはB03班の見市建先生（早稲田大学）に務めていただきました。

6月23日にA03班との共催で開催されたワークショップ「移民第2世代のコネクティビティとアイデンティティ」では、東洋大学の村上一基先生による「フランスにおけるムスリムコミュニティと移民第2世代」を開催し、移民第二世代のムスリムが個人主義的な選択として新たなアイデンティティを探求する様子について報告があり、本研究班で日本のムスリムの第二、第三世代がまさに直面しているアイデンティティの模索を研究している工藤正子さん（立教大学）がコメンテーターを務めました。移民の第二、第三世代が故郷を離れて、居住する地域での自らのあり方を探っている状況は、ある意味で戦略的であるかに感じられるところであり、本研究班の研究課題にも多くの示唆を与えるものと言えます。

9月29日のワークショップでは、本研究班研究員の藻谷悠介さん（大阪大学）が「ムハンマド・アリー政権によるシリア統治の「戦略」：在地ムスリム及び非ムスリムとのコネクティビティ」と題する報告を行い、19世紀エジプトにおける近代化改革を牽引したムハンマド・アリーが歴史的シリア地域を統治した10年弱の期間において、同政権が在地非ムスリムを積極的に任用するなど、非ムスリムを戦略的に取り込んだ統治体



ラーホール城内の『ラーマーヤナ』の一場面が描かれた装飾画（2022年、パキスタン、山根聡撮影）

制を作り上げていたことを報告しました。コメンテーターとして呼び出した東北大学の大河原知樹先生と共に、ムスリムによる統治の中に見られる政治的戦略性と非ムスリムとのコネクティビティについて、考察を深めることができました。

11月23日には、科研費基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」との共催で、「イスラームとリクリエーション——余暇を創造的に楽しむ女性たち (Recreation and the Creative Muslimah)」と題したワークショップを開催し、本研究班で招聘したFaiza Muhammad Dinさん(フンボルト大学)が旅行やイベント開催などに関わる世界各地のムスリム女性たちによる創造的な取り組みを取り上げ、彼女たちが余暇におけるリクリエーションをいかにしてムスリムの美学に適合させ、受容可能なものにしようとしているのかを議論しました。リクリエーションに見られる創造的な試みは、ムスリム女性たちの戦略とも言い換えられるもので、本研究班にもまさに創造性に満ちた研究材料を提示してくれるものであったと思います。

11月26日と27日の二日間にわたって、大阪大学箕面キャンパスにおいてA02班との共催で、イスラーム信頼学第2回国際会議「Translation and Transformation in Muslims' Connectivity」が開催されました。本研究班からは、工藤正子さんによる「Negotiating Identity among Muslim Women with Pakistani Fathers and Japanese Mothers」、池田一人さん(大阪大学)による「Becoming Rohingya in Myanmar」の報告のほか、上述のムハンマディーンさんによる報告「Trust and Muslim Women's Mobility」も行われました。国際会議の詳細は別途設けていますので、そちらをご覧ください。

12月12日、AA研共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる「イスラーム化」前期」と共催で「Muslim Connectivity Viewed from Thought and Strategy: Cases of Southeast and South Asia」と題するワークショップを開催し、本研究班で招聘していたジャワ研究の碩学Henri Chambert-Loir先生(フランス極東学院)による「From Kawi to Jawi: The Adoption of the Arabic Script in the Malay World」、同じく本研究班招聘のMarie Lall先生(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)とオンライン参加のAnupriya Sharmaさん(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)による「Exploring the Strategies of Muslim NGOs to Recreate Trust and Connectivity in South Asia」という報告をしていただきました。シャンベルロワール先生は、ジャワにおけるサンスクリット系の文字使用がアラビア文字になる過程と、現地での墓標の文字等を例示しながら、ジャワのイスラーム化の過程を分析されました。これはムスリムが新たに流入する歴史的過程での非ムスリム



カイロのコルバ広場に設置された巨大なクリスマスツリー (2022年、エジプト、藻谷悠介撮影)

との関係性を言語と文字の変化で明らかにするご報告でした。ラル先生とシャルマさんは、インドにおけるムスリムNGOが、非ムスリムとの共存を模索する過程を、NGOの具体的活動例を挙げつつ報告されました。こちらのご報告も、現代においてムスリムが非ムスリムとのコネクティビティにおいていかに戦略的に関わろうとしているかを明らかにしました。

コロナ禍に伴う海外渡航の規制が徐々に緩和される中、分担者もイギリス、オランダ、エジプトなどへの調査を再開できるようになり、研究成果の公開に向けさらに研究を進めています。この点に関して、10月1日には総括班の企画として開催されている「信頼学のキッチン」において、藻谷悠介さんがコロナ後のエジプトにおけるフィールド調査の現況について、エジプト国立図書館・文書館での史料調査の様子を中心に報告を行っています。



研究代表者

石井正子

立教大学

研究分担者

小副川琢 日本大学

日下部尚徳 立教大学

熊倉潤 法政大学

佐原徹哉 明治大学

鈴木啓之 東京大学

武内進一 東京外国語大学

飛内悠子 盛岡大学

見市建 早稲田大学

研究員

山本沙希 立教大学

2022年度の活動

ーフィリピン・ミンダナオ島における合同調査

B03班は、2022年度には、海外合同調査とワークショップを行いました。ここでは、2022年8月11日から17日にフィリピンのミンダナオ島で行った合同調査について報告します。

合同調査の行程



合同調査の日程

8月 訪問場所	訪問先
11 イリガン市 (A) 到着	
12 マラウィ市 (B)	マラウィ包囲戦の跡地 ミンダナオ国立大学マラウィ校 ミンダナオ国立大学イリガン校
13 マラウィ市 (B) 訪問	ムスリムミンダナオ学院 ミンダナオ国立大学マラウィ校 アガカーン博物館 モロ民族解放戦線 (MNLF) 幹部 イブンシナ統合学校
14 北コタバト州ビキット町周辺 (D) 北コタバト州カルメン町マニリ村	モロイスラム解放戦線 (MILF) 基地 マニリ虐殺跡地訪問
15 コタバト市 (C)	暫定自治政府 (BTA)
16 マギンダナオ州 スルタンクダラト町 (E) ジェネラルサントス市 (F)	モロイスラム解放戦線 (MILF) 基地 ミンダナオ国立大学 ジェネラルサントス校
17 ジェネラルサントス市 (F) 出発	

B03班は、紛争影響地域で長期にわたるフィールドワークを行ってきたメンバーで構成されています。武力紛争を生きる人びとの経験や生々しい感情に迫り、そこで形成される信頼やコネクティビティを比較研究によって明らかにしよう、と始めました。ところが始まりと同時にコロナに見舞われ、国内のワークショップですらオンラインでの開催を余儀なくされる事態となりました。メンバー同士が一度も対面で顔を合わせる事のない状態が続いたのです。海外合同調査も2021年度の夏に実施する予定だったのですが、次年度に繰越さざるを得ませんでした。

しかし、2021年度の後半になると、ワクチン接種、出国前のPCR検査による陰性証明書の提出などを条件に、いくつかの国が旅行者にもビザを出すようになってきました。フィリピンでも2022年が明けると、入国規制が緩和されました。そこで、B03班代表者の石井正子が半年間の研究休暇(サバティカル)を取ることに合わせて同年4月にミンダナオ島に入り、合同調査の準備をすることになったのです。

合同調査に参加したのは熊倉潤、佐原徹哉、飛内悠子、石井正子の4名でした。他のメンバーも直前まで参加を検討していたのですが、パンデミックも終息していない時世にあって諸事情で参加がかなわず、予定よりも少数になってしまったのは少し残念でしたが、4名は正味5日間でムスリムが多く暮らすミンダナオ島の西側を北から南へ縦断する調査を行いました。

マラウィ包囲戦の跡地訪問

まず8月12日と13日に、マラウィ市を訪れました(写真)。ここでは、2017年5月23日から10月23日にかけて、国軍がIS(イスラム国)に忠誠を誓うグループを同市の一角に包囲し、壊滅させる「マラウィ包囲戦」が起きました。

マラウィ包囲戦は、中東で勢力を弱めたISの一部が東南アジアなどに拡散したと報じられたなかで起きました。マラウィ包囲戦を闘ったIS戦闘員のなかには、マレーシア人やインドネシア人などの外国人の存在が確認されています。しかし、ヤカン人の指導者イスニロン・ハピロンなどの数名を除けば、大多数が地元のマラウィ市とその周辺に生活するマラナオ人でした。これは、イラクとシリアで権勢を振るったISにチェチェン、新疆ウイグル、ヨーロッパ、フィリピンやインドネシアを含む東南アジア出身者など、実際の戦闘地域とつながりが薄いムスリムが多数馳せ参じた状況とは異なっています。マラウィ包囲戦で闘ったISに忠誠を誓うグループを、地元の住民や知識人はどのように見ていたのでしょうか。合同調査ではこの点について聞き取りを行いました。

MILF 基地 Camp Rajamuda



上級相補佐アブドゥッラー・クサイン氏訪問



マラウィ包囲戦跡地

フィリピン南部では約50年間にわたって、ムスリムを中心とした先住民の自決権確立を目指して武力闘争を展開する分離運動派（主にモロイスラム解放戦線：MILFとモロ民族解放戦線：MNLF）とフィリピン政府とのあいだで紛争が展開されてきました。うちMILFは2014年に包括的和平合意を結び、前ドゥテルテ政権下の2019年2月にフィリピン南部にバンサモロ暫定自治政府（Bangsamoro Transition Authority）が発足しました。

MILFとMNLFが近代国民国家の秩序内での改革を目指すのに対して、ISはその秩序を否定するイスラーム国家の樹立を目指しました。この点において、ISの立場は前二者とは全く異なっています。しかし、戦闘員に地元の青年が多かったこともあり、住民のなかにはISを否定しつつも、それに忠誠を誓う動機には、フィリピン政府に振るわれた不正義を正すというMNLFとMILFとの共通点を見出す人びとがいることが分かりました。

8月14日には、北コタバト州ピキット町周辺にあるMILFの基地を訪れました（写真）。この基地は、和平合意によって公認された6つの基地のうちの1つであり、非軍事的用途への転換が図られています。実はこの基地の近くには、2010年にMILFから分派したバンサモロ・イスラム自由戦士

（Bangsamoro Islamic Freedom Fighters: BIFF）の拠点があります。ゆえに、この基地所属のMILF兵士とBIFFとの交戦が起こるのですが、MILF側には、本来はムスリム同士との闘いは避けたい、という強い思いがあることを知りました。

8月15日には、バンサモロ暫定自治政府の政府庁舎を訪れ、アホド・イブラヒム首相を表敬訪問する予定でした。しかし、満期を迎えて退陣したドゥテルテ政権に代わって6月30日に発足したフェルディナンド・マルコスJr政権との会議がマニラで急遽開催されることになり、面会は叶いませんでした。代わりに、上級相補佐のアブドゥッラー・クサイン氏や首相付のスタッフが私たちを丁寧に歓迎してくださいました（写真）。

クサイン氏に、フィリピン政府と暫定自治政府との信頼について聞くと、両者のあいだには、MILFが納得するかたちで和平合意が履行されていること、政府間関係を調整する会議の開催を通じた同志意識が生まれていることなど、特にドゥテルテ政権下において厚い信頼が構築されたとのことでした。こうした「上からの平和構築」がうまくいっている一方で、武力紛争で命や財産を奪われた一般の人びとに対する移行期正義が実現にいたっておらず、「下からの平和構築」には、長い時間がかかるだろうとの見通しを述べました。

デジタル・ヒューマニティーズ的手法による コネクティビティ分析



研究代表者

熊倉和歌子

東京外国語大学AA研

研究分担者

新井和広 慶應義塾大学

石田友梨 岡山大学

伊藤隆郎 神戸大学

後藤 寛 横浜市立大学

篠田知暁 東京外国語大学AA研

永崎研宣 人文情報学研究所

MALLETT Alexander 早稲田大学

研究員

佐藤 将 東京外国語大学AA研

2022年度の活動

今年度、C01班はデジタル人文学の手法を目指すワークショップ、刊行予定のシリーズ「イスラームからつなぐ」の企画、各自の研究成果報告の3点を進めた。まず、ワークショップについては、「DHハンズオンセミナー：ネットワーク可視化ツールPalladio & Gephi」（オンラインで全2回。講師は石田友梨氏）を開催した。開催時間が夜19時からであったにもかかわらず、班の垣根をこえて参加者が集まった。ワークショップでは、各自が持つデータをネットワーク図にすることを目標に、ツ

ルの特徴をおさえながら、データの作成方法や可視化方法のノウハウについての説明がなされた。このような企画は、昨年度に開催した「デジタル・ヒューマニティーズ Summer Days 2021」（オンラインで全4回）に引き続いての開催であったが、これらを通じて、手書きテキスト認識（HTR）、地理情報システム（GIS）、RDF（Resource Description Framework）、TEI（Text Encoding Initiative）、そして今回、ネットワーク可視化ツールを扱った。これにより、テキストのデジタル化（HTR）から、データの記述（RDF, TEI）、可視化（GIS, ネットワーク可視化ツール）までの作業に必要な基本的な手法を一通り習得することができた。今後は、これらの知識が各自の研究に活かされていくことを期待したい。

今年度の活動の2点目は、シリーズ「イスラームからつなぐ」第8巻の企画である。執筆者が集まり、巻の趣旨を確認しながら、各章の内容を紹介しあった。これらの作業を通じ、これまで、「人文情報学」としていた「デジタルヒューマニティーズ」の訳語を「デジタル人文学」に改めることとした。「人文情報学」は、人文学的な情報学、と読めてしまうためである。私たちが進めるのは、情報学的な（手法を用いた）人文学研究であるということがより伝わりやすい「デジタル人文学」を採用することとなった。

3点目の活動として各自の研究成果報告が挙げられるが、今年度は国内外の学会や国際会議での研究報告が複数なされ、着実に成果に結びついていることが確認された。5月には日本中東学会にて研究分担者である篠田知暁氏が「15～16世紀グマール山地の知識人ネットワーク形成」を報告した。7月には国際会議DH2022 Tokyoが開催され、執筆者は須永恵美子氏との共同報告（Wakako Kumakura & Emiko Sunaga, “Visualizing Academic Networks and Trends through Acknowledgements: Japanese Scholars in Islam-related Studies”）を行った。12月には、エジプトで開催された第1回リモートセンシングと宇宙科学アプリケーション国際会議で、C01班の研究員を務める佐藤将氏が共同報告（Naoko Fukami, Susumu



図1：カイロ旧市街の街路ネットワークのコネクティビティを分析した図（佐藤将氏による分析）。

Sato, Yuta Arai, Takenori Yoshimura, Yuko Abe, and Wakako Kumakura, "Morphological Analysis of Nineteenth-century Cairo")を行った。また、研究協力者である太田(塚田)絵里奈氏は、イジャーズを通じた師弟関係の可視化分析を進めており、その成果は10月の日本オリエント学会、2023年1月のB01班との共催WSにて報告された。さらに、研究分担者である永崎研宣氏、石田友梨氏が編者を務めた『人文学のためのテキストデータ構築入門：TEIガイドラインに準拠した取り組みにむけて』が2022年8月に刊行され、同年11月にはデジタルアーカイブ学会第4回学会賞学術賞(著書)を受賞した。この書籍については、本ニュースレターの24ページに「新刊紹介」があるのでそちらを参照されたい。

このように、C01班の研究計画は、着実に成果に結びついており、全体としては順調に進んでいると言ってよい。今後は書籍の刊行に向けて、個人研究に集中していくことになるであろう。その中で、次のような課題を意識しながら進めていきたい。第1に、可視化分析の有効性への批判的検証についてである。私たちが扱う歴史資料から得られる情報は、現代社会において得られるデータセットとは異なり、不完全なものである。そうした資料から一定の基準で抽出したデータを可視化した場合に見えるものは、何らかの偏りを持つ。これまでの段階においては、それぞれの歴史資料からどういった情報が得られ、それらをどのように可視化できるかという議論が中心になされてきたが、今後は不完全な情報を可視化分析する意義についても批判的検証が加えられるべきであろう。その作業においては徹底した史料批判が必要となるだろうが、それもまたC01班の研究活動の意義につながるに違いない。

第2に、本研究プロジェクト全体のキーワードとなっている「コネクティビティ」や「信頼」の問題にどこまで向き合うことができるかである。可視化されたつながりから、これらについてどのような議論が展開されるかを示すには、既存のネットワーク研究や信頼研究の知識が求められるであろう。今後は、そのような先行研究を共有するような機会も設けていきたいと考えている。

最後に、運営面での課題についても述べておきたい。「イスラーム信頼学」はコロナ禍において始まり、現在もなお終息していない。他方、今年度に入ってから、学務等の日常の業務は対面で行われるようになり、元の生活に戻つつある。そうした中で、オンラインでのコミュニケーションをベースにしてきた私たちの研究活動は今後どのように対応していくべきか考えさせられてもいる。一つには、対面での業務が増えたことにより、オンラインで集まることにも支障が出始めている。



図2：カイロ旧市街の一角で。旧市街の街区を一本一本歩いて調査を行った。深見奈緒子氏(日本学術振興会カイロ研究連絡センター)とモハメド・ソリマン氏(国立天文・地球物理研究所)が現地案内役を引き受けてくださった。



図3：カイロ旧市街の女性下着専門店。

図2、3の撮影者は執筆者。2022年12月。

コロナ禍はオンラインで多くの人が集まれる状況を生み出したが、その効率性ゆえに、オンラインでのミーティングやイベントの数が増加した。オンラインと対面が併存するようになった現在、ミーティングやイベントの数はそのままに、対面での業務をこなす日々となっており、忙しさが増しているように感じる。もう一つには、4年目を迎えようとしているにもかかわらず、メンバーが対面で一堂に会する機会がこれまでになかったことが挙げられる。それでも研究さえ順調に進んでいれば対面で会う機会を設定する必要はないのだろうか。人間関係のあり方自体についても考えさせられる。それぞれの事情はあると思うが、来年度以降は、対面でのミーティングの機会も織り交ぜていきたい。

1. 総括班事務局より

●総括班事務局の体制

事務局運営：太田信宏、野田仁、熊倉和歌子

事務局員：村瀬智子、臼杵悠、出川英里

事務局所在地：〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所6階(605室)

事務局連絡先：connectivity_jimukyoku@tufs.ac.jp

●広告媒体

ウェブサイト：<https://connectivity.aa-ken.jp/>

ウェブサイト内ブログへの投稿を随時受付しております。
<https://connectivity.aa-ken.jp/newsletter/newscat/blog/>
 メーリングリストを通じてワークショップなどのイベント情報
 を発信いたします。[https://docs.google.com/forms/
 d/1nng0A7IYrbcBl5_ihcxomZm9Wif_0r9kSMd2WENCow](https://docs.google.com/forms/d/1nng0A7IYrbcBl5_ihcxomZm9Wif_0r9kSMd2WENCow)



●研究員着任のお知らせ

2022年度、イスラーム信頼学は新たに荒井悠太さんをA01班研究員としてむかえました。

荒井悠太 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・研究員)

14世紀のアラブ史家イブン・ハルドゥーンを中心に、前近代アラビア語圏における歴史叙述のあり方を、とくに歴史叙述と政治権力とのかかわりといった観点から研究してきました。また歴史叙述の背景にある、膨大な歴史的情報の伝達を可能とした写本の伝播ネットワークやウラマー・ネットワークにも関心を持っています。「イスラーム信頼学」とのかかわりにおいては、従来の手法とデジタル・ヒューマニティーズ的手法との複合から、アラビア語写本研究や伝記研究の新たな可能性を模索したいと考えています。

2. 2022年度に開催した研究集会など

全体集会

◆2023/3/2

2022年度イスラーム信頼学全体集会
 「対立と紛争のなかで、つなぐ」

総合司会：石井正子

討論者：辻信一(明治学院大学)

ポスターセッション・シビルダイアログ
 展示(企画展「学知の共創を考える：イス
 ラーム信頼学・シビルダイアログキャラ
 バンの試み」)

開会の挨拶

趣旨説明 石井正子

第1話者 鈴木啓之「紛争下での信頼と猜
 疑：パレスチナ人と「他者」が織り成す関

係性」

第2話者 昔農英明「ドイツのムスリムと
 ユダヤ人の関係性からみる移民問題の現
 状」

第3話者 熊倉潤「新疆ウイグル自治区に
 おける信頼あるいは団結の問題：民族幹
 部の形成と変容」

第4話者 黒木英充「第一次世界大戦期の
 レバノン・シリア移民と中東地域の再編」

コメント 辻信一

全体討論

ポスターセッション・コアタイム

閉会の挨拶

シビルダイアログ展示・コアタイム

シンポジウム・国際会議

◆2022/9/7

“Middle Eastern, Balkan and
 Japanese Perspectives on the Global
 and Regional Impacts of the Ukraine
 War” **総括班** ほか

Hidemitsu Kuroki “Welcome Remarks and Preamble”

Karim Makdisi (American University of
 Beirut) “The Crisis of the International
 Order in Light of the Ukraine War”

Kimitaka Matsuzato (The University of
 Tokyo) “Secession Conflicts and How
 to Solve Them: Towards Comparison
 between the Former Communist
 Countries and the Middle East”

Tasos Kostopoulos (The Institute for

Mediterranean Studies, Crete) "Ukraine, Macedonia, Palestine: Collective Identity Transformations on the Way to the Nation-state"
Mustafa Türkes (Middle East Technical University, Ankara) "The War that Must never Have Been Fought: The multiple failures in Ukraine"
Dima de Clerck (American University of Beirut) "The Ukrainian War from a General Lebanese Perspective, in a Context of Severe Socioeconomic Crisis, and Security and Political Instability and Uncertainty"
Q & A, Break
Tetsuya Sahara "Honor and Manhood in Contemporary Paramilitarism in the Balkans and Caucasus"
Predrag Marković (Institute of Contemporary History, Belgrade) "New Privateers: Paramilitary Forces as 'War Entrepreneurs' in Yugoslav Wars, 1991 – 1999"
Ken'ichiro Takao (Middle East Institute of Japan, Tokyo) "The Present and Prospect of the Global Jihadists"
Q & A, Break
Discussion

◆2022/11/26-27

イスラーム信頼学第二回国際会議

"Translation and Transformation in Muslim's Connectivity" **A02**, **B02**

-Saturday, 26 November

Moderator: So Yamane

Opening Address by Hidemitsu Kuroki

Introduction by So Yamane

1st Session: Legal Pluralism and Islam in the History of Empires

Moderator: Jin Noda

Discussant: Gagandeep S. Sood (London School of Economics and Political Science, UK)

Guy Burak (New York University, USA)

"Writing a Conceptual History of Early Ottoman Kanun (From Chinggis Khan to Bayezid II)"

Zhanar Jampeissova (Astana IT University, Kazakhstan) and Jin Noda "Translated 'Legal' Code: Difference of Understanding the Law between Kazakh Nomads and Russian Colonial Officials"
Information Exchange Meeting

-Sunday, 27 November

2nd Session: Faith and Strategy: The Dynamics of Trust Building within Muslim Communities

Moderator: Emi Goto

Discussant: Marrie Lall (University College London, UK)

Faiza Muhammad Din (Humboldt University, Germany) "Trust and Muslim Women's Mobility"

Masako Kudo "Negotiating Identity among Muslim Women with Pakistani Fathers and Japanese Mothers: An Exploration of Connectivity, Gender, and Strategic Perspectives"

Lunch Break

3rd Session: Right and Law in the Multi-Ethnic Societies

Moderator: So Yamane

Discussant: Zaw Lynn Aung (Independent Researcher) and Gagandeep S. Sood
Kazuto Ikeda "Becoming Rohingya in Myanmar: Ethnic Politics in the U Nu Era 1948-1962"

Sayaka Takano "Legal Pluralism and Connectivity in Indonesia"

General Discussions

Moderator: Jin Noda

Concluding Remarks by Jin Noda

◆2023/2/5, 11

Al Jazeera ドキュメンタリー

『教科書のナクバ』日本語字幕

完成記念上映会+トーク **A03**

登壇者：レーン・ミトリー（監督）、ムハンマド・エルアルビード（構想・企画）

-2/5 東京会場

趣旨説明 黒木英充

ドキュメンタリー「教科書のナクバ」上映

講演：ムハンマド・エルアルビード

コメント：鈴木啓之

Q & A：レーン・ミトリー、ムハンマド・エルアルビード

司会：黒木英充、通訳：森晋太郎

-2/11 京都会場

主催者挨拶・映画「教科書のナクバ」解説
「教科書のナクバ」上映

コメント：李英哲（朝鮮大学校教授）「民族アイデンティティと教育」

パネル・ディスカッション：ムハンマド・エルアルビード、レーン・ミトリー、李英哲、岡真理（京都大学）

質疑応答

◆2023/2/18

公開シンポジウム

「演劇と抵抗：48/イスラエルで

パレスチナ人のナラティブを

表現する取り組み」 **B03**

登壇者：エイナット・ヴァイツマンさん
(劇作家)

開催挨拶 (石井正子)

エイナット・ヴァイツマンさんの紹介 (村井華代)

講演 (エイナット・ヴァイツマン)

日本語通訳：渡辺真帆

対談 (エイナット・ヴァイツマン・鈴木啓之)

質疑応答

閉会挨拶 (新野守広)

◆研究会・ワークショップ・セミナー他

◆2022/4/29

ワークショップ

「強いられる移動を受け止める

近代の仕組み」 **A03**, **C01**

成地草太 (明治大学) 「近代オスマン帝国の難民定住政策における信頼構築とコネクティビティ：1860年代の難民委員会にみる難民支援体制の仕組み」

コメンテーター：新井和広

司会：黒木英充

◆2022/5/20

Seminar

"Research Seminar with Professor M. Khodarkovsky"

総括班, **A02**, **B01** ほか

Michael Khodarkovsky (Loyola University, U.S./Hokkaido University) "Empires of the Steppe: Eurasian Empires in Comparative Perspective, 1500-1900"

◆2022/5/26, 6/2

ワークショップ

「DHハンズオンセミナー：
ネットワーク可視化ツール Palladio &
Gephi」(限定公開) C01 ほか

講師役：石田友梨

◆2022/6/19

Seminar

“Beyond Centre-Periphery Approach:
Inter-minority Tensions and
Development of Contested
Categories of Kurdish Mobilisation”

B01 ほか

Dr. Mostafa Khalili (JSPS/ IAAMES) “Beyond
Centre-Periphery Approach: Inter-minority
Tensions and Development of Contested
Categories of Kurdish Mobilisation in Iran”
Discussant: Keiko Sakai (Chiba University)

◆2022/6/21

ワークショップ

「現代イスラームの思想と戦略：
文明間・男女間の分断の
克服に向けて」 B02, B03

飯塚正人「近代西洋との対立論、「文明の
衝突」論の克服を目指すイスラーム再考の
思想戦略史<序論>」

後藤絵美「イスラームにおける男女平等論
の展開——「ムサーワー」の思想と戦略」

コメンテーター：見市建

司会：藻谷悠介

◆2022/7/5

ワークショップ

「紛争後の権威主義体制の
「正統性」と「信頼度」」(限定公開) B03

趣旨説明(熊倉潤)

富樫耕介(同志社大学)「紛争後の権威主
義体制の「正統性」と「信頼度」：チェエ
ン・カディオフ体制下の illiberal peace は
どのように住民に受容されているのか」

討論者(鈴木啓之)によるコメントと討論

◆2022/7/19

ワークショップ

「近世における権力と
コネクティビティ」 B01, C01

守田まどか「18世紀前半イスタンブルの
街区と異宗教間コネクティビティ」

太田信宏「南アジアの「多様性社会」にお
ける国家体系の形成を再考する——近世
期を中心に」

コメンテーター：篠田知暁

◆2022/8/4

ワークショップ

「移民第2世代のコネクティビティと
アイデンティティ」 A03, B02

村上一基(東洋大学)「フランスにおける
ムスリムコミュニティと移民第2世代」

コメンテーター：工藤正子

司会：黒木英亮

◆2022/9/8

Workshop

“The Mufti of Mecca and Pontianak,
Abdullah al-Zawawi: Networks and
Manuscripts in the Arab Peninsula
and the Southeast Asian Archipelago”
C01 ほか

Yuki Shiozaki (University of Shizuoka)
“Abdullah al-Zawawi as the Transregional
Spiritual Leader of the Naqsbandi Sufi
Order: The Publication of Risala al-Fawaid
al-Wafiyya fi Sharh Ma'na al-Tahiyya in
Riau”

Ahmad Ginanjar Sha'ban (Universitas
Nahdlatul Ulama) “The Meccan Mufti in
“Negeri Jawi”: Sayyid Abdullah al-Zawawi
(1850-1924), His Fatwas, Letters and
Travels in Indonesia”

◆2022/9/22

ワークショップ

「帝国秩序とコネクティビティ」
B01, A02

秋葉淳「オスマン帝国のウラマー職階制：
特権と血縁・地縁的結合」

真下裕之「ムガル帝国の人的紐帯：マンサ
ブ制度の内と外」

コメンテーター：高松洋一

◆2022/9/29

ワークショップ

「思想と戦略に見る
ムスリム・コネクティビティ：
歴史的シリア地域の事例から」 B02

藻谷悠介「ムハンマド・アリー政権による
シリア統治の「戦略」：在地ムスリムおよ
び非ムスリムとのコネクティビティ」

コメンテーター：大河原知樹(東北大学)

◆2022/9/30

Workshop

“Refugees and Social Crises” A03

Rawia Altaweel (Post-Doctoral Researcher
(Chiba University), Beirut) “Situation
Update: Syrian Refugees in Lebanon”
Moderator: Hidemitsu Kuroki

◆2022/10/24-11/13

2022年度シビルダイアログ企画

「空と海がつなぐ世界」総括班

-10月24日・25日・28日

在園児向けワークショップ

-11月5日-13日

展示「空と海がつなぐ世界」

-11月5日・6日

おはなし会&ワークショップ

-11月8日

在園児向け展示解説

◆2022/11/23

Seminar

“Recreation and the Creative
Muslimah” B02 ほか

Speaker: Faiza Muhammad Din (Humboldt
University of Berlin)

◆2022/11/24

Lecture

“The Rediscovery of a Phantom
Library: Studying the Library of
Ahmad Pasha al-Jazzar” A02, C01

Guy Burak (New York University) “The
Rediscovery of a Phantom Library:
Studying the Library of Ahmad Pasha al-
Jazzar (d. 1804)”

◆2022/12/4-8

Workshop

The Iraqi Japanese Workshop

(第13回日本・イラク合同学術会議)

「日本とイラクの歴史、政治と社会：両国の視座から」 **A03** ほか

-Day 1: 4 December - University of Baghdad- College of Arts

Keynote Lecture: Hidemitsu Kuroki
"Middle Eastern Studies in Japan: Its Short History and Potential"

Panel 1: Lecture by Gen Yoneda

"Partnership for the Future of Iraq"

Panel 2: On The Gender and Genocide Studies in Iraq through Iraqi Perception

-Day 2: 5 December - Mustansiriyah University-College of Arts

Keynote Lecture: Eiji Oguma, Keiko Sakai

Panel 3: On Iraqi Social Movements

Panel 4: On Japanese Studies in Iraq

-Day 3: 6 December - Bayt al Hikma

Lecture 1 : Keiko Sakai "1920 Revolution as a Source of Nation-hood of Iraq"

Lecture 2 : Akiko Yoshioka "Power Struggle in Kurdistan of Iraq and Political Mobilization in Disputed Territories: from Analyses of 2021 Iraqi Election"

Lecture 3: Mahmoud Al-Qaysi "How Do Iraqis Understand the Japanese History and Modernization"

Lecture 4: Thana'Mohammed Saleh and Duaa Saad "Attempts to Benefit from the Japanese Educational System in Iraq"

-Day 4: 7 December - College of Arts-Iraqia University

Keynote Lecture: Keiko Sakai, Waissam Abdulrazaq Hussein

Visit to Qiyam Private School

-Day 5: 8 December

Follow-up Meeting with President of University of Baghdad

◆2022/12/12

Workshop

"Muslim Connectivity Viewed from Thought and Strategy: Cases of Southeast Asia and South Asia" **B02**

Henri Chambert-Loir (L'Ecole Française de l'Extrême-Orient) "From Kawi to Jawi: The Adoption of the Arabic Script in the Malay World"

Marie Lall (University College London), Anupriya Sharma (University College London) "Exploring the Strategies of Muslim NGOs to Recreate Trust and Connectivity in South Asia"

◆2022/12/18

講演会(シビルダイアログ企画)

「新居浜にみる多文化共生：

濱中彰さんの思いをつなぐ」 **A03** ほか

講師：徳田剛(大谷大学)「地方部での外国人受け入れの現状と課題：新居浜市の場合」

岡井宏文「世界でつながる、地域でつなげる：濱中彰さんの足跡から多文化共生を考える」

◆2023/1/7

ワークショップ

「信頼を可視化する」

B01, **C01**, **公募研究**

太田(塚田) 絵里奈「15世紀ウラマーの名目的師弟関係にみる“信頼”：RDFグラフを用いた可視化分析」

コメンテーター：伊藤隆郎

◆2023/1/10

勉強会

「武力紛争が避難者および支援者、研究者のメンタルヘルスに与える影響への理解と対応」 **A03**

講師：重村淳(目白大学)

◆2023/1/16

Workshop

"Recent Trends in Andalusi Literature Studies and Its Impact on Arabic Literature" **A03**

Lecturer: Enass Khansa (American University of Beirut)

Chair: Hidemitsu Kuroki

Introduction by Hidemitsu Kuroki

Lecture by Enass Khansa "Recent Trends in Andalusi Literature Studies and Its Impact on Arabic Literature"

◆2023/1/21

ワークショップ

「オスマン・カリフ制をめぐる議論」

B01

藤波伸嘉(津田塾大学)「立憲君主の再イスラーム化？—オスマン帝国憲法と近代的カリフ制」

コメンテーター：長縄宣博

◆2023/1/31

ワークショップ

「ルワンダのジェノサイド罪を裁いたガチャチャー—近隣に暮らす被害者と加害者の賠償をめぐる対話と

関係構築—」(限定公開) **B03**, **A03**

報告者：片山夏紀(大阪大学)

討論者：長有紀枝

◆2023/2/18, 21

連続講演会

「TEI (Text Encoding Initiative) ×

Libraryが拓くデジタル人文学と

図書館の未来」 **総括班** ほか

講演者：Yasmin Faghihi (ケンブリッジ大学)、Huw Jones (ケンブリッジ大学)

コーディネーター：永崎研宣

-2月18日

「インターフェースを越えて：デジタル人文学のためのデータとしてのTEI」

-2月21日

「デジタルカタログとデジタルライブラリー：コレクションデータのためのTEIの活用」

◆2023/2/19

ワークショップ

「近世の海洋空間をめぐる異文化接触と信頼～海賊への対応を事例として

～」

A02, **B01** ほか

司会：野田仁

末森晴賀(北海道大学)「17世紀末～18世紀初頭地中海の海賊をめぐるオスマン朝—ヴェネツィア関係」

嘉藤慎作「17世紀後半～18世紀初頭インド洋海域における通航の安全保障めぐって：ムガル朝・オランダ東インド会社間関係の分析から」

コメント：薩摩真介(立命館大学)

◆2023/2/22

ワークショップ

「比較の中のイスラーム経済」

A01, C01

発表者：荒井悠太

発表題目：「歴史叙述・権力・経済——イブン・ハルドゥーン『イバルの書』における人間社会観」

コメントーター：伊藤隆郎

◆2023/2/27-3/10

展示

「学知の共創を考える：

イスラーム信頼学・シビルダイアログキャラバンの試み」総括班

- ・2021年度実施報告（パネル・会場レイアウト図・写真）
- ・2022年度実施報告（パネル・会場レイアウト図・写真）
- ・保育園・来場者からのフィードバック
- ・実施後の展開（外部での報告等）
- ・マインドマップ「対話を継続するために」
- ・展示解説ツアー＆トーク（東京外国語大学学際研究共創センター（TReNDセンター）（2023/3/6）ナビゲーター：太田絵里奈

◆2023/3/3

Workshop

“Trade, Diplomacy and Capitulations in Early Modern World” B01

Moderator: KONDO Nobuaki (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies)
DAITO Norifumi (Historiographical Institute, the University of Tokyo) “Trade, Consumption and Diplomacy in the Indian Ocean”

Michael TALBOT (University of Greenwich)
“Diplomacy in Practice: Dispute Resolution in Eighteenth-Century Ottoman-British Relations”

MATSUI Masako (Aichi Gakuin University)
“Dutch Encounters with the Ottoman Empire: Did Ottoman Capitulations influence Dutch Eastern Diplomacy?”

◆2023/3/9

Workshop

“Layers of Law and Maritoriality in the Ottoman Mediterranean” B01

Michael Talbot (University of Greenwich)
“From Abode of Holy War to the Waters of the Sublime State: Layers of Law and Maritoriality in the Ottoman Mediterranean”
Moderator: KONDO Nobuaki

◆2023/3/22

共同利用・共同研究課題

「中東・イスラームの歴史と

歴史空間の可視化分析—デジタル化時代の学知の共有をめざして」研究会

C01 ほか

伊藤隆郎・太田絵里奈「15世紀アラビア語伝記集のデジタル解析に向けて」

佐藤将「GISを用いた歴史的カイロの都市空間の分析」

加藤博（一橋大学）「空間から歴史を読み解く：大戦間期エジプト・スエズ運河の船舶通過事情」

コメント：後藤寛、新井和広

◆2023/3/24

Seminar

“Social Inclusion of Non-combatants after Religious Conflicts in Indonesia”

B03

Speaker:

Siti Hanifah (The Asian Muslim Action Network (AMAN) Indonesia)

Munajat (State Islamic University of Salatiga)

Moderator & Introduction: Ken Miichi

(2023年2月21日現在)

浅井登紀子 (あさいとさきこ)

1988年生／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程／南アジア地域研究、文化人類学

主要業績：「フィールドワーク便り 「故郷」を訪ねて」(『アジア・アフリカ地域研究』第22-1号、131-135頁、2022年)

●**ひとこと**：内戦による国内避難を経験したムスリムの人々について研究を行っており、今後の調査ではムスリム女性をとりまくつながりについて理解を深めたいと考えています。

磯貝真澄 (いそがいますみ)

1976年生／千葉大学大学院人文科学研究科／近現代中央ユーラシア史

主要業績：『帝国ロシアとムスリムの法』(共編著、昭和堂、2022年)

●**ひとこと**：最近では、文献を丁寧に読み、そこに書かれた情報を注意深く集めて分析するのはもちろんとして、書かれなかった事柄に論理的にアプローチするには、どのような方法がよいだろうかなどと考えています。

伊藤隆郎 (いとう たかお)

1970年生／神戸大学大学院人文学研究科／前近代アラブ史

主要業績：「マムルーク朝の歴史叙述における黒死病」(『西南アジア研究』94号、1-35頁、2022年)

●**ひとこと**：六十の手習いならぬ五十の手習いで人文情報学やプログラミングの勉強を始めました。細かいことが気になる性分で、木を見て森を見ずになりがちなので、distant readingを習得し、広い視野で研究できるようになりたいと思っています。

奥田弦希 (おくだげんき)

1995年生／東京大学大学院人文社会系研究科博士課程／近現代史ハプスブルク帝国史

主要業績：「二重主義体制下ハプスブルク帝国のイスラーム教徒及び対イスラーム政策——20世紀初頭ウィーンにおけるモスク建設計画を中心に」(『クリオ』第34号、1-15頁、2020年)

●**ひとこと**：1908年のボスニア併合以降のハプスブルク帝国のムスリム住民に対する政策について、ボスニアから帝国のオーストリア半部に移住してきたムスリム住民に対する政策を中心に研究しています。

長有紀枝 (おさ ゆきえ)

1963年生／立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科／国際政治学

主要業績：『スレブレニツァ・ジェノサイド——25年目の教訓と課題』(編著、東信堂、2020年)

●**ひとこと**：スレブレニツァに関する研究を継続するとともに、ジェノサイド条約の父、ラファエル・レムキンと日本との関係を辿ってみたいと思っています。

賀川恵理香 (かがわ えりか)

1993年生／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程／南アジア地域研究

主要業績：「Veil and Gaze: The Practice of Pardah in Urban Female College Students in Contemporary Pakistan」(『Created and Contested』27-49頁、2022年)

●**ひとこと**：パキスタンにおけるヴェール着用方法が時代を経てどのように変化してきたのかを調べたいと思っています。

出川英里 (でがわ えり)

1990年／千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程／エジプト近代史

主要業績：「エジプト混合裁判所の制度的特質——裁判所設立にむけた国際交渉(1867-75)における議論に着目して」(『千葉大学人文公共学研究論集』第45号、33-49頁、2022年)

●**ひとこと**：混合裁判所という外国人が関わる訴訟を管轄した裁判所を研究しており、そこから現地住民と外国人の関係を見ていきたいと考えています。また、人文情報学にも関心を持っています。

ハシャン・アンマール

(Khashan Ammar)

1983年アレppo(シリア)生／立命館大学立命館アジア・日本研究機構／地域研究、イスラーム法学、ハディース学

主要業績：『イスラーム経済の原像——ムハンマド時代の法規定形成から現代の革新まで』(ナカニシヤ出版、2022年)

平野(野元)美佐 (ひらののものとみさ)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／文化人類学・地域研究

主要業績：『アフリカ都市の民族誌——カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷』(明石書店、2005年)

●**ひとこと**：沖縄の模合調査を本にまとめる予定です。模合の面白さ・奥深さを伝え、模合をしなくなっている沖縄の若い世代に読んでもらいたいと思っています。

ニツ山達朗 (ふたつやまたつろう)

1980年生／香川大学経済学部／宗教学人類学・イスラームの人類学・中東地域研究

●**ひとこと**：これまでクルアーンが記された物質について着目してきたので、それがスマートフォンのなかで記された場合に、どのような変化があるのか興味があります。

黛秋津 (まゆづみ あきつ)

1970年生／東京大学／バルカン・黒海地域研究、国際関係史

主要業績：『三つの世界の狭間で——西欧・ロシア・オスマンとワラキア・モルドヴァ問題』(名古屋大学出版会、2013年)

●**ひとこと**：2022年秋にようやく海外調査を再開することができました。海外渡航できないこの2年半の生活がどれほど味気なかったことか。やはり地域研究者は外の空気を吸わないとだめだということがよくわかりました。

Islamic Trust Studies News Letter

イスラーム信頼学 News Letter No. 03

2023年3月20日発行

文部科学省科学研究費・学術変革領域研究 (A)
「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：
世界の分断をのりこえる戦略知の創造」
(イスラーム信頼学) 総括班事務局
<https://connectivity.aa-ken.jp/>

[デザイン]
株式会社 デザインコンビピア

[発行]
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
電話 042-330-5600 FAX 042-330-5610
<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

* 本誌の無断転載、複製、複写の一切を禁ず。

表紙解説

表題：Jahangir Preferring a Sufi Shaikh to Kings (諸王よりもスーフィーの長老を好むジャハーンギール)
作者：Bichitr (active between ca. 1615 -1640), Margins by Muhammad Sadiq
出典：The St. Petersburg Album, Freer Gallery of Art, Smithsonian Institute, Washington D.C. (<https://asia.si.edu/object/F1942.15a/>, 2023年1月18日閲覧)

ワシントンD.C.にあるスミソニアン協会フリーア美術館に所蔵される絵画で、ムガル朝の宮廷画家ビチットゥルによって1615年から1618年の間に描かれたとされる。砂時計の玉座の上にいるムガル朝第4代皇帝ジャハーンギール（在位1605-1627）が、隣に控えるスーフィーの長老に自身の書物を手渡しており、その様子をオスマン朝スルタン（モデルは不明だが陰影を用いた西洋の画風）とイングランド王ジェームズ1世、さらには一番下で絵画を抱えた画家自身（名前や服装からヒンドゥー教徒と目される）が見つめている。ジャハーンギールは次第に神秘主義に傾倒したとされ、スーフィー（ジャハーンギールと関係の深かったチシュティー教団）の長老が君主たちよりも上に置かれる構図は、そのことをよく表している。

絵画の中でも特に目を引くのは、一般に知られる肖像画の姿によく似せて描かれたジェームズ1世であるが、これはイギリス大使トマス・ローがジャハーンギールに贈ったジェームズ1世の肖像画が実際にモデルとされたためと考えられている。スーフィー長老やオスマン朝スルタンのみならず、ヒンドゥー教徒やイングランド王までもが描かれているこの絵画は、南アジアのムスリム王朝が有したネットワークの広がり、強大なムスリム君主が見据えていた関係構築の地平を我々に伝えてくれる。

解説：藻谷悠介

参考文献

Ahmed, Khalid A., ed. *Intercultural Encounter in Mughal Miniatures (Mughal-Christian Miniatures)*. Lahore: A National College of Arts Publication, 1995.
池田直子「ビチットゥル作〈スーフィーに本を贈るジャハーンギール〉の図像解釈：ムガル朝とオスマン朝に関する試論」『千葉大学人文社会学研究』13, 14-26, 2006.